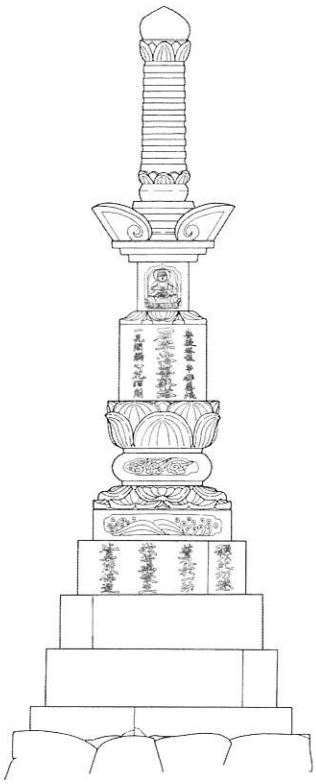
富山市埋蔵文化財調査報告 83

富山市内石造物調査報告書

V



２０１６

富山市教育委員会
埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した、市内に所在する近世石造物と関連する石造物の調査報告書である。

2　現地調査から報告書作成に至るまでに、次の方々の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表します（順不同、敬称略）。

尾田武雄、宮路金山家、亀田正夫、久々忠義、酒井靖春、佐藤武彦、城岡朋洋、高野靖彦、長　秋雄、西井龍儀、平井一雄、間野　達、三鍋久雄、安田良栄、米原　寛、宝林山福王寺、瀧脇山大川寺、富山県[立山博物館]、立山町文化財保護審議委員会

3　本書の執筆は、当センター職員の協力を得て古川知明（埋蔵文化財センター所長）が行った。

目　　次

例言　1

Ⅰ　宝篋印塔

1　宝林山福王寺（射水市）　2

2　宮路金山家墓所（立山町）　27

Ⅱ　巡礼塔　49

参考文献　54

報告抄録　55

調査位置図　（国土地理院地形図より）

1　宝林山福王寺　　2　宮路金山家墓所　　3　芦峅寺明念坂

Ⅰ　宝篋印塔

1　宝林山福王寺宝篋印塔

(1) 調査の目的　　石造宝篋印塔の年代・製作石工・製作の歴史的背景を解明するための記録調査
(2) 調査日　　平成 26 年（2014）10 月～平成 27 年 7 月
(3) 調査者　　古川知明（埋蔵文化財センター所長）
(4) 所在地　　射水市加茂中部 550　宝林山福王寺住職墓内
(5) 種別　　宝篋印塔
(6) 年代　　①安永 2 年（1773）以降、②江戸後期

(7) 福王寺の概要

宝林山福王寺は、真言宗古刹である。

弘仁年間（810－824）空海上人開基とする。その後清和天皇（850－880）勅願所となった。

『三州寺号帳』では、応永 2 年（1395）中興とする。貞享 2 年（1685）提出の『寺社由緒書上』でもこれを支持する。この時の住職は実祐である〔井上校訂 1974〕。

『下村史』及び当寺作成『福王寺号寶林山』(「沿革」) によれば、中興一世の実祐は、延宝 2 年（1674）本堂を建立した。その後現在まで 19 世に及ぶ。

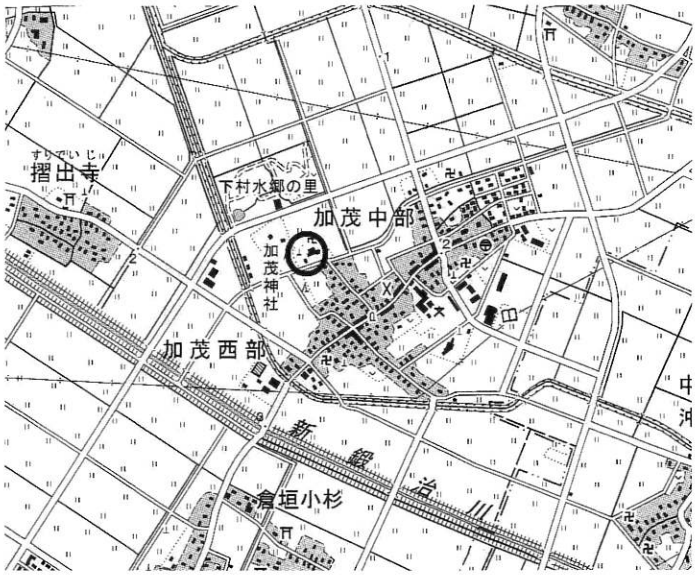


図 1　福王寺の位置

(8) 調査概要

①全体概要

宝篋印塔は、本堂南側に所在する住職墓内に 2 基がある。この 2 基は、近年新設された住職墓（かろうとを新設）の直上に、東西に並べて置かれている。正面は東側である。

手前の東側の石塔を宝篋印塔 1、奥の西側の石塔を宝篋印塔 2 とし、以下記述を進める。

宝篋印塔は、2 基ともに組合せ式の石造塔で、各石材は良好に遺存している。後述するように、部材は一部組合せが変わっている。

かろうと前には安山岩製の手水鉢 1 基がある。宝篋印塔に付随していたものかもしれない。

かろうとの後ろには、舟形墓石を主体とした住職墓石等の墓石が置かれている。

②宝篋印塔 1 の概要（表 1・図 2）

A　概要

現存する本体高さは 61.6 寸（186.6cm）である。

石塔の構成は、上から相輪・笠・塔身（5 段）・基礎（3 段）の 10 段構成で、基壇は欠失する。

笠は別物が転用されている。

軸 1 は、本来笠の下にあったが、笠の上に移動している。

B　各部の詳細

【相輪】　上から宝珠・上部請花・九輪・下部請花・伏鉢の順となる。これらは 1 石で造る。

宝珠は半球形で、上端は尖る。先端は欠失する。

上部請花は単弁で、主弁４葉、間弁４葉の計８葉である。主弁は平らで薄い。間弁もす薄く、先端は三角形状となる。稜はない。

九輪は、塔２に比べ間隔が狭いため、相輪全体が短い。九輪の表面は平らである。１段目より９段目の径が大きく、下に広がる。

下部請花は、上辺３弧となる花頭形で、薄く縁取る。

下部請花と伏鉢の間に欠首がある。

伏鉢は、半球状である。

【笠】　軒上４段、軒下３段である。軒上は階段状となり、上ほど小さい。

隅飾突起は 39.5°の角度で外側へ広がる。斜めとなる下端は、緩やかに凸状にカーブする。他の宝篋印塔はこの部分は直線であり、本例は特殊といえる。隅飾突起外面は無文である。

軒下は階段状に小さくなる。

石材は砂岩で、別物の転用である。型式上、塔２の笠が本来この塔の笠であったと推定される。

【塔身】　４石５段で構成する。上から軸１、反花、軸２、請花、饅頭形となる。反花とその下の軸２を１石で造る。

［軸１］　やや縦長の方形石である。

４面には、四角く彫り込んだ内側に、月輪とその下に蓮弁を浮彫りする。月輪の中央には梵字種子を薬研彫で陰刻する。４つの梵字種子は、密教でいう金剛界曼荼羅に説く金剛界五仏のうち大日如来を除く四仏を示す。宝篋印塔本体は主尊である大日如来を意味するとされる。四仏は通常定まった方位に配置される。北面は不空成就如来（梵字種子：アク）東面は阿閦如来（梵字種子：ウーン）、南面は宝生如来（梵字種子：タラーク）、西面は阿弥陀如来（梵字種子：キリーク）である。本塔では、正面である東面がウーンであるはずのところアクとなっており、90°時計方向にずれが生じていることがわかる。

月輪下には蓮弁がある。主弁５葉と子葉２弁からなる。主弁は、中央に１、左右に２ずつで、外側の弁は、中を彫り下げて立体感を出している。子葉は細く小さい。

［反花］　軸２と１石で彫る。

主弁２段×８葉=16 弁の蓮弁で、間に間弁を置き、計 24 弁である。主弁は、上下段とも厚みがあり、

表1　宝篋印塔1規格

	区分	部位	高さ		幅		石材	備考
			寸	cm	寸	cm		
本体	相輪		18	54.5	5	15.2	立山天狗山石	
	笠		6.7	20.3	13.4	40.6	砂岩	別物
	塔身	軸1	5.5	16.7	4.8	14.5	八川石	4面額内に陽刻月輪・蓮華座。月輪内に四仏梵字
		反花	2	6.1	8.9	27.0	八川石	軸2と1石
		軸2	9.2	27.9	8.9	27.0		正面:梵字「シッチリア」、2面経文、1面梵字38字
		請花	4.7	14.2	13	39.4	立山天狗山石	
		饅頭形	2.5	7.6	10.6	32.1	立山天狗山石	
	基礎	反花	2.5	7.6	14.5	43.9	立山天狗山石	基礎と1石
		基礎	4	12.1	14.5	43.9		反花と1石
		基礎2	6.5	19.7	19.4	58.8	立山天狗山石	1面に刻銘「真源大和尚之塔」
	計		61.6	186.6				

()内は現存寸法

弁の先端は尖って反る。間弁の先端は縦長の稜があり三角形状である。

［軸２］　反花と１石で彫る。四面には刻銘がある。銘文は陰刻で彫る。

正面となる東面は、中央に大きく梵字シッチリア（宝篋印陀羅尼経を意味する）を薬研彫で彫り、この塔の性格を表す。

南面は「諸仏害篋全身／如在覩率内院／分身利見尽未／来際設化利物」、北面は「挙手低頭結縁／諸宗一華一香／周遍法界六大／四曼三密正行」と経文である。これらは諸経から引用した語句を組み合わせた作文とみられる。

南面の「諸仏害篋」は、類似語として「諸仏香篋」が「仏説十地経」（大正新脩大蔵経 T2087）中に見えるが、書写誤りでなく、宝篋印塔を意味する語句として「害篋」としたのであろう。「害」は「宝」と同音である。

南面の「覩率内院」は、「法華伝記」（大正新脩大蔵経 T2068）ほか 10 経に見える。他経では「都率」と表記するが「覩率」も同音である。

北面の「挙手低頭」「周遍法界」「六大四曼三密」の各用語は、複数経に見えるが、共通して見える経文は唯一「大日経疏妙印鈔」（大正新脩大蔵経 T2213）がある。

西面は梵字 38 文字である。「ノウ・バ・マ・カ・ボ・□・バ・□／カ・□・タ・ホ・バ・タ・ギャ・ト／カ・エー・バ・バ・□・タ・タ・サ（シャ）／アー・□・ル・ダ・エー・バ・バ・ヂ／ノウ・カ（ホ）・シラ・シャ・マ（ノゥ）・ピリオド」。経文と思われるが、文意は不明。

全体の銘文の流れは、梵字シッチリア（正面・東面）→経文引用願意（南面）→梵字 38 文字（西面）→経文引用願意（北面）となる。

［請花］　１石で造る。主弁は８葉の二重形式で、間に間弁を置き、計 24 葉である。上面の主弁は厚みがあり、先端が尖って反る。弁中央は丸く膨らむ。下面の主弁の厚みは薄く、先端が丸い。中央に稜をもつ。間弁は、先端が丸く薄い。中央に稜をもつ。

［饅頭形］　１石で造る。平面形は四角形で、側面は半円形である。側面は４面とも無文である。

【基礎】　２段である。上段の基礎は、上部の反花とその下の方形石を１石で造る。

反花は、主弁は８葉の二重形式で、間に間弁を置き、計 24 葉である。上面の主弁は薄く、先端は厚みをもち尖る。下面の主弁も厚みは薄く、先端はやや厚みをもち尖る。尖る度合は上面より小さい。間弁は、厚みがあり、先端が三角形に尖り、中央に稜をもつ。請花の弁とは特徴が異なる。

基礎側面は、正面に四角い額を彫り、「真源大和尚之塔」と楷書で陰刻する。安永 2 年（1773）3 月に死去した４代真源ご住職を供養するため造立したことを示す。

残る３面は四角い額を彫り、内部は無文である。

下段の基礎は、切石２石を横置きしたものである。４面ともに無文である。

この下にあった切石積基壇は失われた。

③宝篋印塔２の概要

Ａ　概要（表２、図３）

現存する本体高さは 65.5 寸（198.5cm）である。

石塔の構成は、上から相輪・笠・塔身（５段）・基礎（３段）の 10 段構成で、基壇は欠失する。

笠は、推定であるが、塔１の笠が転用されている。

軸１は、本来笠の下にあったが、笠の上に移動している。

Ｂ　各部の詳細

【相輪】　上から宝珠・上部請花・九輪・下部請花・伏鉢の順となる。これらは１石で造る。

宝珠は円柱形で、上部はやや丸くなり、上端は小さく尖る。

上部請花は単弁で、主弁４葉、間弁４葉の計８葉である。主弁は丸みを帯び、先端は三角形となる。間弁は稜をもつ。

九輪は、等間隔に置かれ、九輪の表面は平らである。１段目と９段目の径はほぼ同じである。

下部請花は、上辺３弧となる花頭形で、薄く縁取る。

伏鉢は、円錐状に下が広がり、側面は直線的で丸みがない。

【笠】　軒上５段、軒下３段である。軒上は１段目が三角形に突出し、２段目以上が階段状となり、上ほど小さい。

隅飾突起は60°の角度で外側へ大きく広がる。斜めとなる下端は直線的である。内側は弧状となる。隅飾突起外面の文様は、輪郭を巻いた弧下端が渦巻状となり、内部は無文であるが、やや粗い筋ノミ状の平坦整形により凹凸を表現する。隅飾突起上面は無文である。

軒下は階段状に小さくなる。軸２との接合面の状況は不明である。

【塔身】　４石５段で構成する。上から軸１、反花、軸２、請花、饅頭形となり、反花と軸２を１石で造る。

［軸１］　やや縦長の方形石である。４面には、四角い額内に、月輪を浮彫し、その下に蓮華座を陰刻する。月輪の中央やや上に梵字種子を薬研彫風に陰刻する。４つの梵字種子は塔１同様金剛界四仏である。本塔では、正面である東面がウーンであるはずのところアクとなっており、90°時計方向にずれが生じている。

月輪下の蓮弁は、主弁７葉と子葉２弁からなる。主弁は、中央に１、左右に３ずつで、子葉は太い。

［反花］　軸２と１石で彫る。

主弁は８葉の二重形式で、間に間弁を置き、計24葉である。上面の主弁は薄く、先端は尖って反る。下面の主弁も厚みは薄く、先端はやや厚みをもち尖って反る。間弁は、厚みがあり、三角形に尖り、中央に稜をもつ。弁先端は平たい。基礎反花の弁の特徴と一致する。

［軸２］　反花と１石で彫る。

正面となる東面はやや崩れた花頭形に彫り込んだ中に、蓮華座に坐した弥勒菩薩を浮彫する。像形は、五智宝冠を被り、印相は禅定印である。手の上には宝塔をもつ。蓮弁は丸みを帯びる。細部までよく彫り込んでいる。

他の３面は無文である。

表2　宝篋印塔2規格

	区分	部位	高さ		幅		石材	備考
			寸	cm	寸	cm		
本体	相輪		18.8	57.0	5.5	16.7	立山天狗山石	宝珠先端部欠。高さは復元高。
	笠		6.9	20.9	16.5	50.0	立山天狗山石	隅飾突起60°外傾
	塔身	軸1	5	15.2	5.4	16.4	八川石	4面額内陽刻月輪内に四仏梵字、蓮華座陰刻。
		反花	2	6.1	9.1	27.6	立山天狗山石	軸2と1石
		軸2	10.8	32.7	9.1	27.6		正面額内に弥勒菩薩坐像
		請花	5.5	16.7	14	42.4	安山岩	
		饅頭形	4	12.1	11	33.3	安山岩	正面に波涛文浮彫（陽刻）
	基礎	反花	2	6.1	15.7	47.6	八川石	基礎と1石
		基礎	4	12.1	15.7	47.6		反花と1石
		基礎2	6.5	19.7	20	60.6	安山岩	
	計		65.5	198.5				

［請花］　1石で造る。主弁は8葉の二重形式で、間に間弁を置き、計24葉である。上面の主弁は厚みがあり、先端が尖って反る。弁中央は丸く膨らむ。下面の主弁の厚みは薄く、先端が丸い。間弁は、先端が丸く薄い。中央に稜をもつ。これは軸2の蓮華座の蓮弁の特徴と一致する。

［饅頭形］　1石で造る。平面形は四角形で、側面は半円形である。

側面は、正面に波涛文を陽刻で浮彫する。額はない。波涛は、左右の波が中央でぶつかり左右に分かれるが左右非対称の構図である。残る3面は無文である。

【基礎】　基礎は2段である。上段の基礎は、上部の反花とその下の方形石を1石で造る。

反花は、主弁は8葉の二重形式で、間に間弁を置き、計24葉である。上面の主弁は薄く、先端は厚みをもち尖る。下面の主弁も厚みは薄く、先端はやや厚みをもち尖る。尖る度合は上面より小さい。間弁は、厚みがあり、先端が三角形に尖り、中央に稜をもつ。軸1上の反花と同一の様式である。

基礎側面は4面とも無文である。

下段の基礎は、切石2石を横置きしたものである。4面ともに無文である。

この下にあった切石積基壇は、失われた。

④手水鉢

球形で、上面に水穴がある。正面に梵字「ア」が陰刻されている。

最大径9.2寸（27.8cm）、高さ5.3寸（16cm）で、水穴は径6.3寸（19cm）、深さ3.6寸（10.9cm）の丸底である。

底面は、径4寸（12.1cm）で、ハツリ整形により平らになっている。安山岩製。

⑤住職墓（表3）

当寺住職墓は、宝篋印塔2基と、その裏（西側）に整然と置かれている23基の墓石類のある範囲を含めた長方形区画である。

一般的な真言宗寺院における住職墓石は、無縫塔（卵塔）型式をとるが、富山県内においては無縫塔のほか、弥勒菩薩形丸彫のものが含まれる場合がある。

本寺においては、無縫塔は2基だけで、他に、五輪塔・舟形・円頂方形・円頂方柱がある。像のある舟形（有像舟形）が多く、像形は地蔵菩薩が主である。

23基のうち、僧籍者名が見えるものは14基があり、うち当寺住職であることが確認できるものは9基がある。

再興開基の実祐は、五輪塔（№2）の基礎に「実祐大和尚」と彫られる。この基礎は、他の部材が砂岩（推定では猪谷石）であるのに対し、これのみ安山岩であり、元来は五輪塔（№3）の基礎であったと考えられる。

また、舟形地蔵4体（№5、7、9、10）はすべて像形が同じで、光背右に彫られる「当寺第〇世〇〇大和尚」が同じ文字・体裁であることから、一括して製作されたと考えることができる。この石材は常願寺川産の八川石（安山岩）であり、製作石工は常願寺川石工と推定できる。候補者としては、馬瀬口村中川甚右衛門〔古川2011〕がいる。

やや大型の舟形2体（№15、22）は、像形は大日如来と阿弥陀如来で異なるが、顔貌が同じであり、同一石工の製作による。いずれも明治10年代である。15には「金沢遍照寺照岳大和尚」、22には「高野上珠院照永大和尚」とある。金沢遍照寺は、真言宗宝憧寺触下の寺院で、元和6年（1620）創建、寺町玉泉寺に隣接して所在し、宝暦9年（1759）の宝暦大火で焼失した。明治4年の大火後転出した。高野山上珠院は、かつての寺坊であり、現在は増福院に併合されている。18世紀前半と推定されている「高野山古地図」（高野山大学図書館蔵）、文化7年「高野山絵図」にも蓮華谷奥の「五大尊」への

表3 福王寺住職墓 墓石一覧

番号	型式	像形	代数	住職名	刻銘1	刻銘2	備考	本体高（寸）	本体幅（寸）	石質
1	丸彫	地蔵菩薩			昭和六十一年／潤徳院法晃妙宣大姉／十一月十八日　尾山宣					花崗岩
2	五輪塔		1	実祐	実祐大和尚		基礎正面に刻銘	35.2		砂岩
3	五輪塔							32.7		安山岩
4	円頂方形				霊弥大竜之塔	宝暦七年丁丑九月晦日		16.3	6.6	安山岩
5	円頂方柱形				大阿闍梨宥清大和尚位	明治十三年一月四日／柳瀬邑竹村円四郎		18.7	9	安山岩
6	舟形				三界万霊					
7	舟形									
8	舟形				金照寺照応大和尚		明治33			安山岩
9	舟形	地蔵菩薩	7	栄堂	当山第七世栄堂大和尚			23.5	10	安山岩
10	舟形				法印戒王上人			20	9.6	安山岩
11	舟形				施主妙貞尼			18.5	10	安山岩
12	舟形							18	9	安山岩
13	舟形		10	澹海	権大僧都法院澹海大和尚　不退			31	11	安山岩
14	舟形	地蔵菩薩	5	祐宝	当山第五世祐宝大和尚			21.8	11.4	安山岩
15	舟形	阿弥陀如来			金沢遍照寺照岳大和尚	明治十五年十月二十九日	阿弥陀定印	26.4	13.4	安山岩
16	舟形									
17	舟形									
18	舟形	地蔵菩薩	9	秀弁	当山第九世秀弁大和尚			22.4	10.9	安山岩
19	舟形	地蔵菩薩	10	澹海	当山第十世澹海大和尚			23.1	10.9	安山岩
20	無縫塔		16	真照	明治三十八年／十六葉伝燈大阿闍梨真照大和尚位／九月二十九日	学頭直照大僧都之墓／照偏建之		25.2	12	凝灰岩
21	無縫塔		12	秀仙	当寺十二葉伝燈大阿闍梨秀仙大和尚			69.5	34	安山岩
22	舟形	大日如来			高野上珠院照永大和尚	明治十一年十二月二十六日	智拳印	78	49	安山岩
23	丸彫	地蔵菩薩								凝灰岩

通りに「上珠院」が見える。正保 2 年（1645）「高野惣山之絵図」には坊名が見えないが、「小坊」と一括しているうちの一つかもしれない。上珠院に関する詳細は不明である。2 体の関係性からみて、本寺住職の誰か（明治 10 年代であれば 16 世真照か）が、高野上珠院住職及び金沢遍照寺住職と師弟関係あるいは出身等の関わりがあったと推定される。

以上の墓石情報を総合して作成した住職一覧は次のとおりである（表 4）。

表4　福王寺住職一覧　　太字は墓石により判明したもの

代	名称	名称2	在年・忌日	西暦	墓石・墓塔	型式	備考
1	実祐	実祐	享保6	1721	○	五輪塔	基礎に銘、延宝2年開基と伝える
2	祐厳	祐厳	元文元	1736			
3	祐清	祐清	寛延2	1749			
4	真源	真源	安永2	1773	○	宝篋印塔	基礎に銘
5	祐宝	祐宝	安永8	1779	○	舟形	光背に銘
6	直龍	真龍					
7	栄堂	栄堂			○	舟形	光背に銘
8	性栄	性栄	寛政・享和				
9	秀弁	秀弁			○	舟形	光背に銘
10	澹海	澹海	文化		○	舟形	光背に銘、2基あり
11	信戒	信戒	文化・文政				
12	秀仙	秀仙	天保5	1834	○	無縫塔	正面に銘（忌日）
13	信祐	信祐					
14	秀栄	秀栄					各願寺29世、明治24没、紀州出身
15	直恵	真栄	嘉永				
16	真照	真恵	明治38	1905	○	無縫塔	正面に銘（忌日）、造立者照徧
17	照徧	真照					
18	成義						
19	義照						現住
	「沿革」	「下村史」	「沿革」				

(9) 考察

①石塔の意義

宝篋印塔はいわゆる宝塔であり、その中に宝篋印陀羅尼経を奉納することにより功徳を得られるとして、宝篋印塔の造立が鎌倉期以降盛んに行われた。

中世（鎌倉・室町・戦国時代）における宝篋印塔は、本例のように塔身全部を刻銘とするものはほとんど見当たらず、梵字種子（バン・キリーク・アーンクなど）や阿弥陀如来坐像等像容を刻出するものが主である。

近世宝篋印塔は、形態や造立目的等の多様性から、石塔形式としての確立した分類編年はなく、中世期からの延長として概括的な変化変容について述べられることが多い。刻銘からのアプローチが一部あるが、特に塔内に納められた経文あるいは礫石経との関係性の分析は、内部の発掘例がほとんどないため検討事例が少ない。近世期における宝篋印陀羅尼経奉納方式の解明はまだ不十分である。

宝篋印塔造立は、江戸中期 18 世紀後半以降に隆盛し、主として寺院境内に設置された。密教では真言宗・天台宗、禅宗では曹洞宗寺院を中心としており、3mを超える大型のものも多い。

これまで行った真言宗寺院医王山東薬寺〔古川・伊集 2008〕・五穀山龍高寺〔古川・蓮沼 2009〕・藤居山富山寺〔富山市教委 2013〕における宝篋印塔及び礫石経の分析から、18 世紀末～19 世紀中頃における宝篋印塔造立は、宝篋印陀羅尼経の書写・納置による造立祭祀という共通性のもとに行われたことが判明した。

宝篋印塔陀羅尼経に書かれた宝篋印塔造立の趣旨は、手段として宝篋印陀羅尼経の納経が行われることが本来の形である。しかし、中世以来全国における宝篋印塔造立の現状を見ると、納経された経典（礫石経が主）は法華経等が主体であり、宝篋印陀羅尼経はごくわずかである。

この意味で、富山における 18 世紀末～19 世紀中頃における真言宗宝篋印塔造立の祭祀のありかた、すなわち宝篋印陀羅尼経の納経行為は、元来の宝篋印塔造立の趣旨に立ち戻ったものであり、仏教史においても大きな画期を示すものと評価できる。

②宝篋印塔の復元

2 基の宝篋印塔は、いずれも元来の姿を留めていないものの、各部材の検討から、造立当初の姿を復元できる部分がある。

A　宝篋印塔 1

宝篋印塔 1 においては、笠が安山岩ではなく砂岩であり別物である。

また、軸 1 は現在笠の上にあるが、本来は笠の下に存在する。

一方、宝篋印塔 2 の笠の下面及び宝篋印塔 1 の軸 2 上の反花の上面は、いずれも 4.8 寸角に収まるように浅く彫り込んでいる。

以上のことから、宝篋印塔 1 は、宝篋印塔 2 の笠が宝篋印塔 1 の笠であり、塔身が上から軸 1・反花・軸 2・請花・饅頭形という標準的な順序で構成されていたことが復元できる。

これにより、復元された宝篋印塔 1 の全体高は、61.8 寸（187.3cm）である（表 5）。

表5　宝篋印塔1　復元規格

	区分	部位	高さ		幅		石材	備考
			寸	cm	寸	cm		
本体	相輪		18	54.5	5	15.2	立山天狗山石	
	笠		6.9	20.9	16.5	50.0	立山天狗山石	隅飾突起外傾角度60°　塔2笠
	塔身	軸1	5.5	16.7	4.8	14.5	八川石	4面額内に陽刻月輪・蓮華座。月輪内に四仏梵字
		反花	2	6.1	8.9	27.0	八川石	軸2と1石
		軸2	9.2	27.9	8.9	27.0		正面:梵字「シッチリア」、2面経文、1面梵字38字
		請花	4.7	14.2	13	39.4	立山天狗山石	
		饅頭形	2.5	7.6	10.6	32.1	立山天狗山石	
	基礎	反花	2.5	7.6	14.5	43.9	立山天狗山石	基礎と1石
		基礎	4	12.1	14.5	43.9		反花と1石
		基礎2	6.5	19.7	19.4	58.8	立山天狗山石	1面に刻銘「真源大和尚之塔」
	計		61.8	187.3				

B　宝篋印塔 2

宝篋印塔 1 の部材と思われる笠を除き、概してこの塔が宝篋印塔 1 より一回り大きい。

復元高は、笠が欠失するため不明である。

③宝篋印塔の年代と製作石工について

前項で復元した宝篋印塔 2 基について、その特徴等を抽出し、造立年代と製作石工を明らかにする。

A　宝篋印塔 1（復元後）（図 4）

この宝篋印塔は、相輪下部請花が花頭形となっている。これは富山町石工佐伯伝右衛門〔古川 2013・2015a〕・同伝助〔古川 2015b〕と常願寺川石工観成〔古川 2014a〕が採用している。

笠の隅飾突起は外傾角は 60°である。伝右衛門は 40°～74°、伝助は 58°、観成は 20°～24°及び 35°であり、伝右衛門または伝助が候補者であり、観成の作ではない。伝右衛門の宝篋印塔の推移から、60°の外傾斜角は概ね 1790 年代、伝助は 1 基のみであるが 1796 年である。

よって、この塔は概ね 1795 年前後に伝右衛門または伝助により製作されたものと推定できる。

B　宝篋印塔 2（復元後）

この宝篋印塔も同様に、相輪下部請花が花頭形となっている。塔 1 に比べ、宝珠の丸みがなく上下に延びること、請花と伏鉢の間に欠首がなく直線的に広がることから、塔 1 よりも後出的である。

軸 2 正面には、宝篋印塔を意味する梵字シッチリアではなく、弥勒菩薩像が浮彫されている。このような浮彫像は他に類例はないが、嘉永元年（1848）岩峅宮路村金山家墓地宝篋印塔（石工宮路村金山弥右衛門）では軸 1 に釈迦如来浮彫像を彫るものがある〔立山町教育委員会編 2012〕。また、真言宗寺院住職における弥勒菩薩形墓石は、文政 2 年（1819）各願寺 24 世昶順以降元治年間頃まで流行した〔古川 2015c〕。

年代決定の根拠となる笠は欠失するが、上記の特徴からみて、塔 2 は文政~嘉永頃の造立が推定される。この頃の富山町石工としては、天保 4 年（1833）～嘉永 5 年に宝篋印塔を製作した見上兵右衛門がいる〔古川 2014b〕。縦長の宝珠・丸みのある請花・波涛文の使用は、兵右衛門における弘化 5 年・嘉永 2 年の宝篋印塔にも見られることからも、その可能性が高いことを裏付ける。

④宝篋印塔造立の背景について

A　宝篋印塔 1（復元後）

宝篋印塔 1 の基礎には、当寺 4 世真源住職の名があり、「真源大和尚之塔」とある。よって、供養塔として造立されたものであり、墓石ではない。

前項で見たように、隅飾突起の外傾角から推定して、この宝篋印塔は概ね 1790 年代に造立されたものと推測できる。とすると、真源住職の忌日は安永 2 年（1773）であることから、23 回忌の 1795 年（寛政 7 年）、25 回忌の 1797 年（寛政 9 年）のいずれかの年忌供養として造立されたことが推定される。

真源住職は、「沿革」では、「心蓮坊中興月海弘秀ノ資栄堂性栄ノ二人ノ弟子アリ　博学ニシテ大阿闍梨耶位ニ登リ寛延四年正月霊名簿改写セラレタリ　安永二年三月二日寂ス」とある。心蓮坊は、かつて魚津市小川寺に所在した真言宗小川山千光寺の子坊 16 のうちの一つである。『魚津区域郷土誌・郷土読物』によれば現在の建物が享保年中（1716—1735）の建築であり、真源住職はそのときの心蓮坊現住であったと考えられる。

富山市五穀山龍高寺の過去帳（№87）には、「権大僧都大阿闍梨法印真源和尚　播州明石■（産か？）」とあり、忌日は同じ安永 2 年 3 月 2 日である。これにより、4 世真源住職は、兵庫県明石市の生まれであることがわかる。

また、寛政 9 年（1797）造立の龍高寺宝篋印塔の基壇刻銘には、「真源大和上」の名がある。調査報告〔古川・蓮沼 2009〕では、この人物を高野山成蓮院左学頭と同定したが、前記過去帳記載の忌日は高野山記録と異なるという疑問があった。これにより、この真源大和上は、福王寺 4 世真源住職のことであり、高野山成蓮院左学頭真源とは別人であることが確定した。

B　宝篋印塔 2（復元後）

宝篋印塔 2 は、刻銘がなく、造立の経緯は不明である。推定できる天保～嘉永頃の本寺住職は、12 世秀仙から 15 世真恵（直恵）が該当する。このうち 12 世秀仙は無縫塔墓石（№21）が存在するので、これを除く 13 世～15 世のいずれかの住職の供養塔と推測される。14 世秀栄は、各願寺 29 世住職で、

明治24年（1891）死去した。各願寺では、27世秀澄住職墓を弥勒菩薩形墓石としており、それを28世秀覚住職が安政5年造立した。秀澄墓石は、常願寺川石工中嶋栄蔵が製作した〔古川2012a・2015c〕。29世となった秀栄住職はこのことを踏まえ、福王寺に移って自分の墓または供養塔に弥勒菩薩を反映したとも想定される。

(10) 結語

2基の宝篋印塔は、福王寺住職に関係した供養塔と考えることができる。

宝篋印塔1は、基礎に「真源大和尚之塔」と刻銘があり、福王寺4世真源住職の供養塔である。宝篋印塔2の笠が本来この塔の笠であり、その隅飾突起の外傾度からみて、1790年代に富山町石工佐伯伝右衛門か伝助によって製作された可能性が高い。よってこの塔1は、真源住職の23回忌あるいは25回忌の年忌供養のため造立されたと推定できる。

真源住職は、魚津小川寺の千光寺末寺の一つ心蓮院住職として、享保年間に本堂を再建したとする（「沿革」）。その後福王寺に移ったとみられる。本寺に真源住職の墓石はなく、供養塔が置かれているだけである。真源住職の死去頃の心蓮坊の現住は栄堂住職である（安永5年「仏ヶ嶽登山記」）。

宝篋印塔2は、軸2に弥勒菩薩浮彫像を彫る。通常正面には宝篋印陀羅尼を意味する梵字種子「シッチリア」等を入れており、このような像形は珍しい。弥勒菩薩は、文政～幕末頃の越中真言宗寺院住職の中で、墓石として丸彫形の弥勒菩薩像を用いることが流行していた。このような影響で、この塔2にも弥勒菩薩像が用いられたのであろう。製作した石工は富山町石工見上兵右衛門と推定される。当寺14世秀栄は、各願寺29世住職を経ており、前代の28世秀覚住職が先代の弥勒菩薩の墓石を製作したのを知り得る立場にあった。このようなことから、宝篋印塔2は14世秀栄に関わる塔であることが推察される。

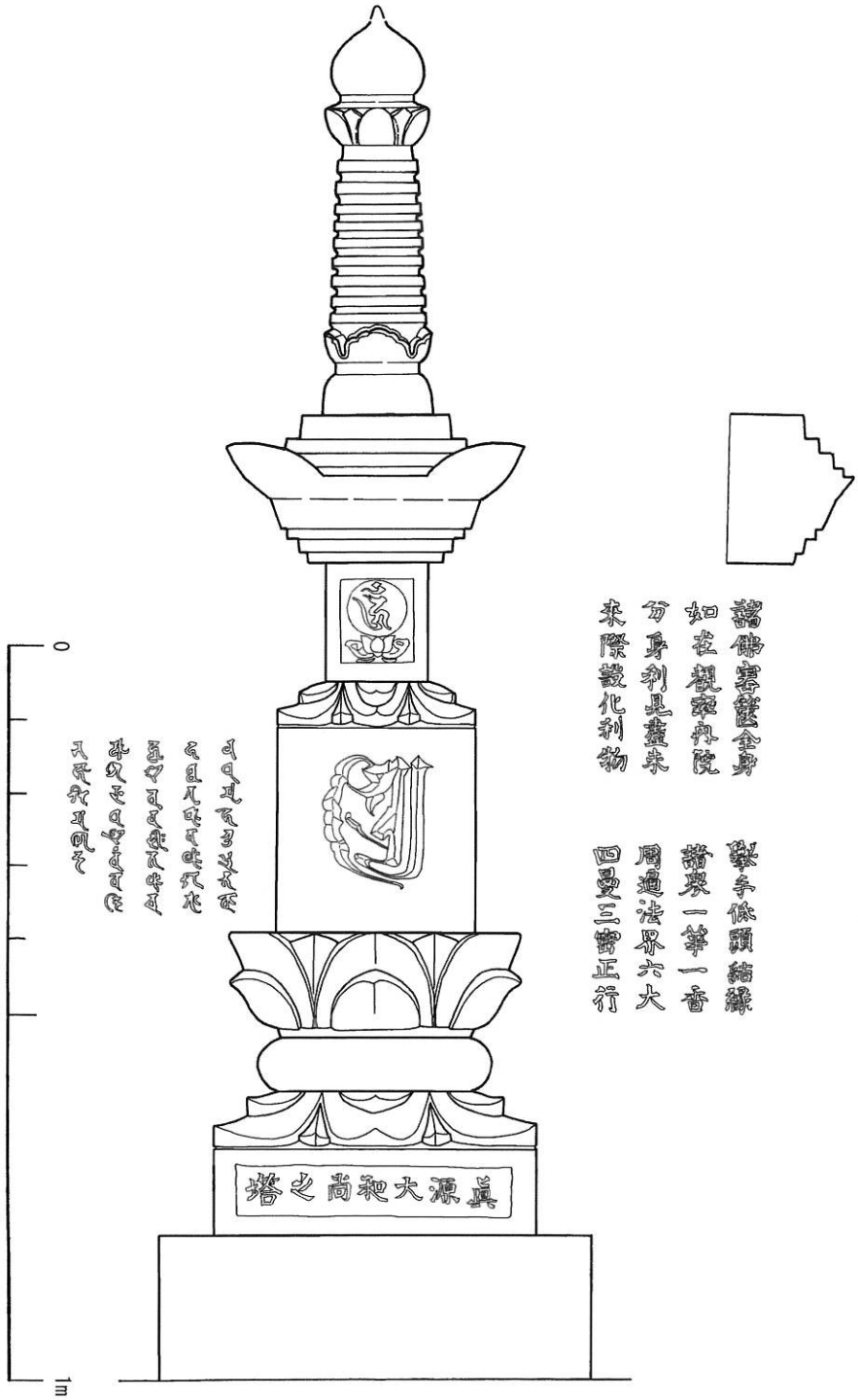
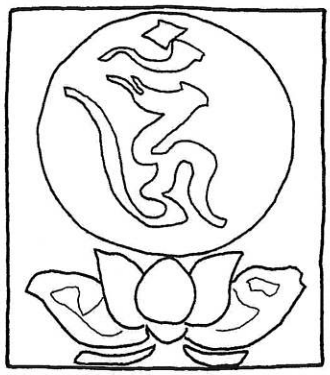


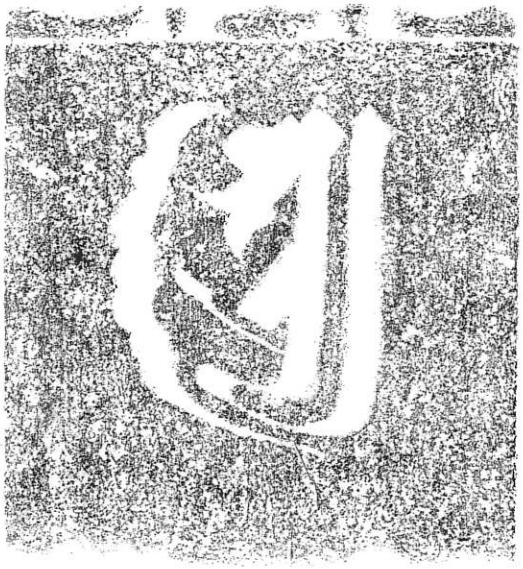
図２　宝篋印塔１　現況実測図

1:10

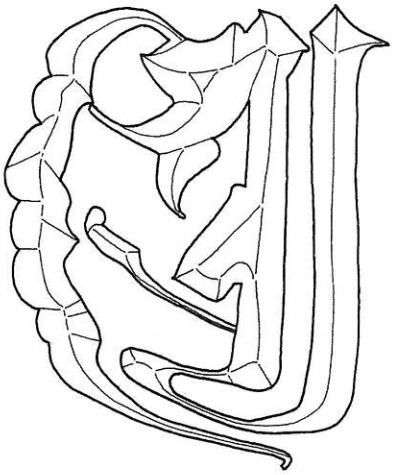
塔１　軸１　東面　拓影（2：5）



塔１　軸１　東面　実測図（2：5）



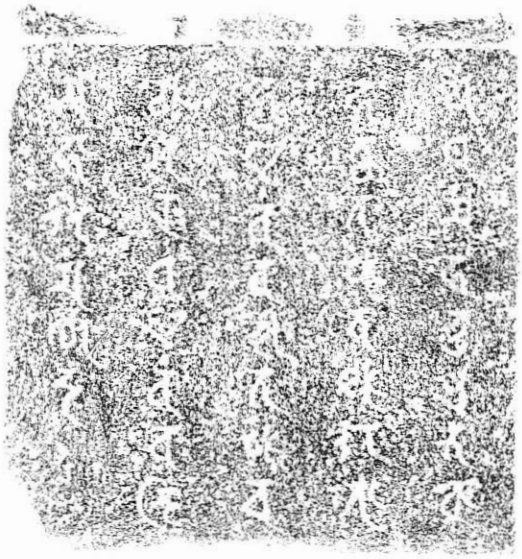
塔１　軸２　東面　拓影（1：4）



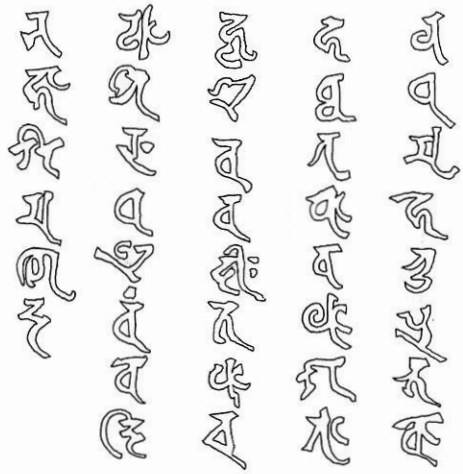
塔１　軸２　東面　実測図（1：3）

塔１　軸２　南面　拓影（1：4）

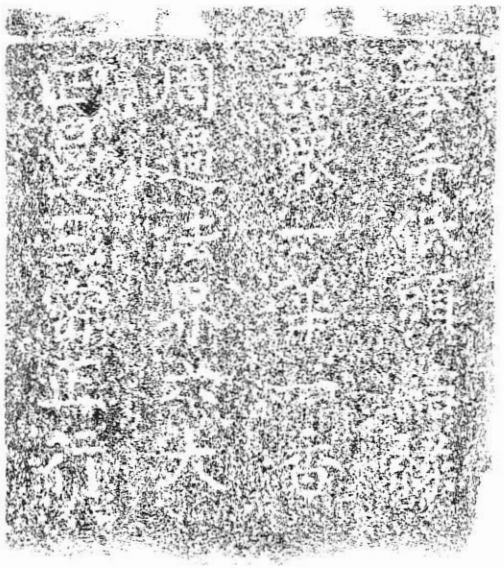
塔１　軸２　南面　実測図（1：4）



塔１　軸２　西面　拓影（1：4）



塔１　軸２　西面　実測図（1：4）



塔１　軸２　北面　拓影（1：4）

塔１　軸２　北面　実測図（1：4）

塔１　基礎　東面　拓影（1：4）

塔１　基礎　東面　実測図（1：4）

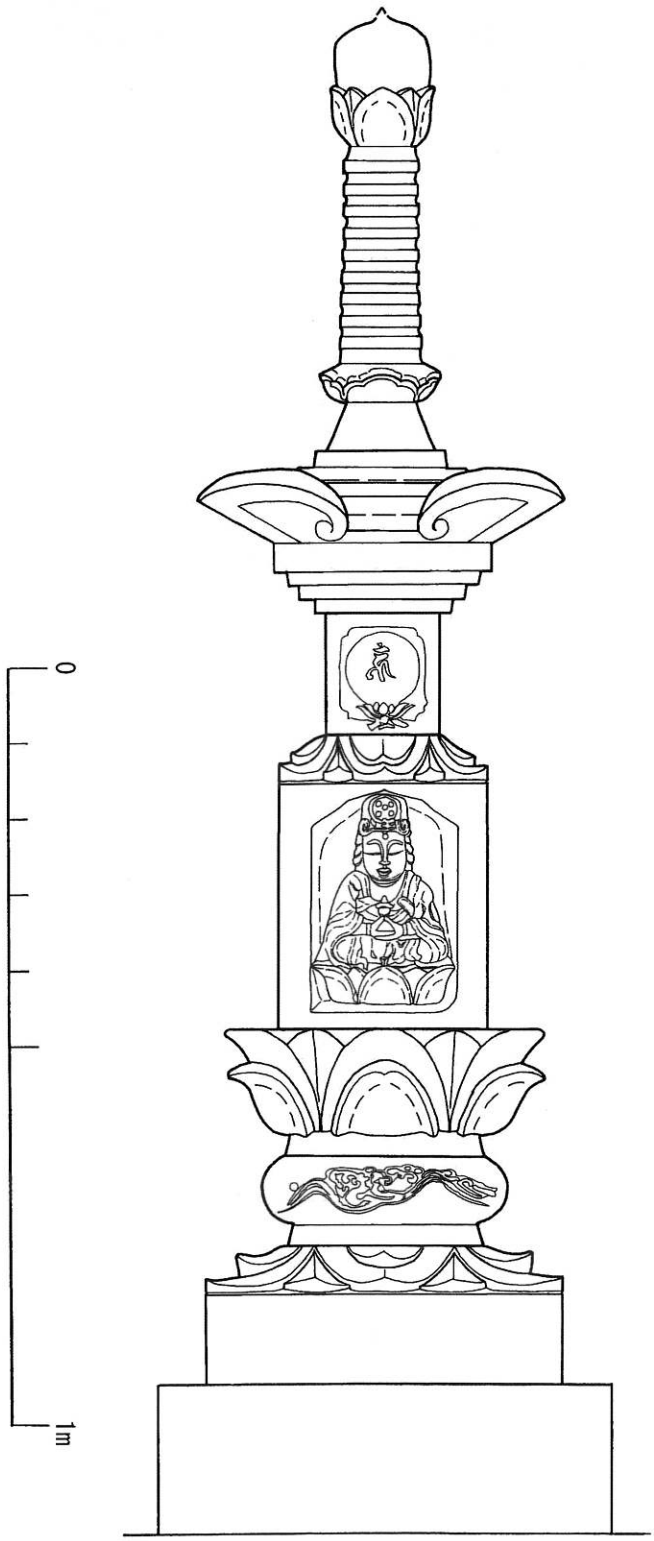
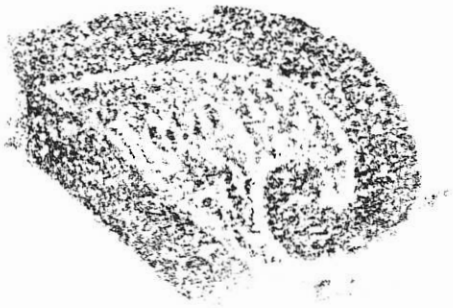


図３　宝篋印塔２　現況実測図

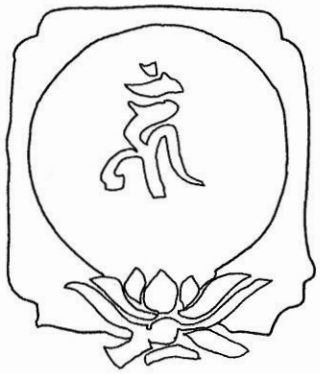
1:10



塔２　笠　隅飾突起　拓影（1：3）

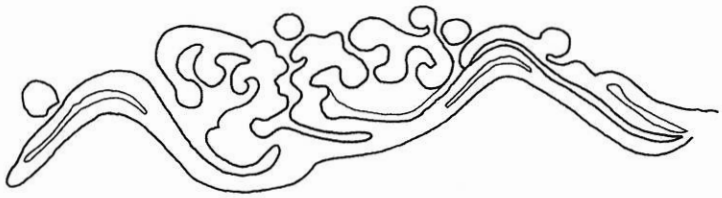
塔２　軸１　拓影（1：3）

塔２　軸２　実測図（1：3）



塔２　軸１　実測図（1：3）

塔２　饅頭形　波涛文浮彫　拓影（1：3）



塔２　饅頭形　波涛文浮彫　実測図（1：3）

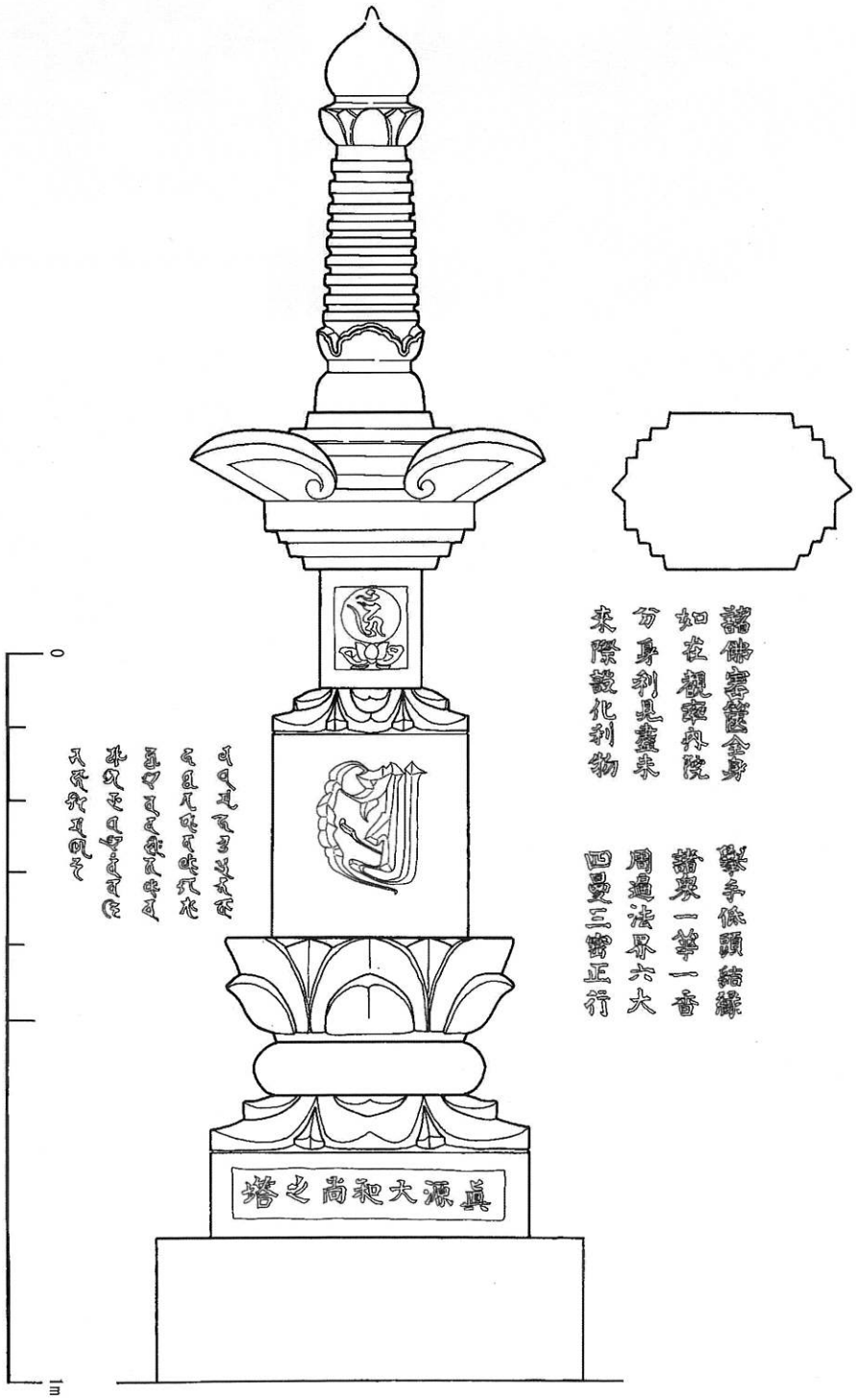
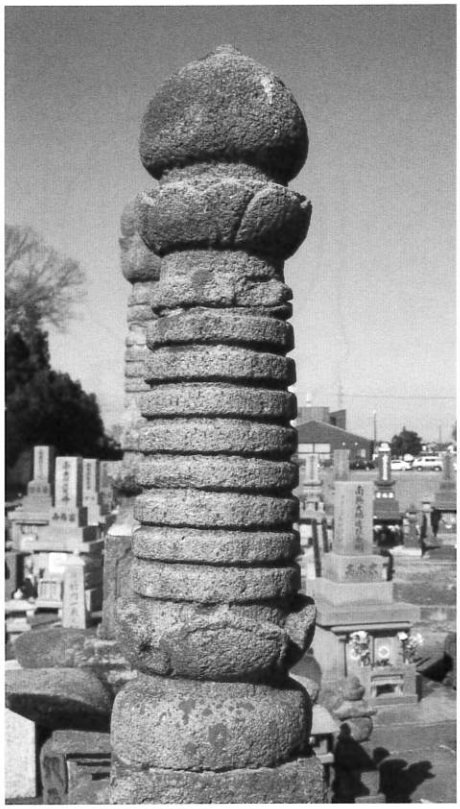

諸佛寄篋金身
如在觀音丹陀
分身利見盡未
来際設化利物
擎手係頭結緣
諸衆一等一香
周遍法界六大
四曼三密正行
眞源大和尚之塔

図４　宝篋印塔１復元図

住職墓近景（南東から）

住職墓近景（南から）

宝篋印塔１　全景（東から）



宝篋印塔１　相輪

相輪　宝珠・請花

宝篋印塔１　相輪　請花・伏鉢

同　笠

同　軸２　シッチリア　薬研彫細部

同　軸２　正面刻銘　梵字シッチリア

同　軸２　シッチリア　薬研彫細部

同　軸２　左面刻銘（経文）

宝篋印塔１　軸２　裏面刻銘（光明真言梵字）

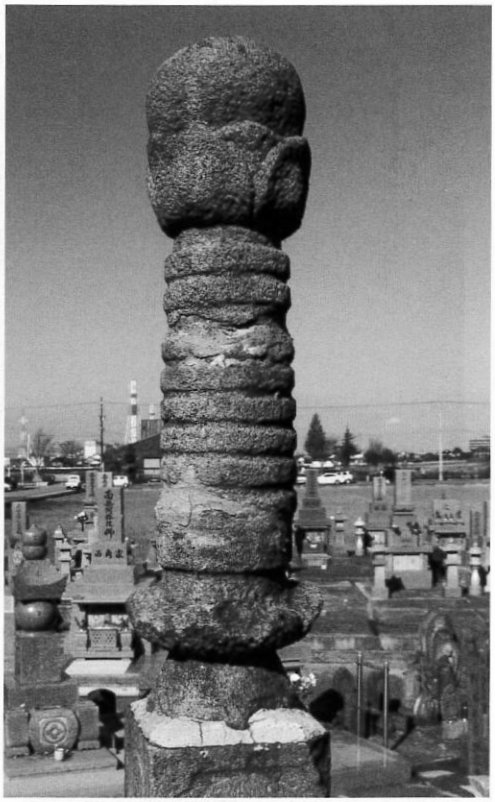
同　軸２　右面刻銘（経文）

同　請花・饅頭形

同　基礎　刻銘「真源大和尚之塔」

同　請花～基壇
蓮弁形状

宝篋印塔２　全景（東から）



同２　相輪

同　相輪　宝珠・請花

同　笠

宝篋印塔２　軸１（南面）
梵字ウン（本来は東面）

同　軸１（北面）
梵字キリーク（本来は西面）

同　軸２（東面）弥勒菩薩浮彫

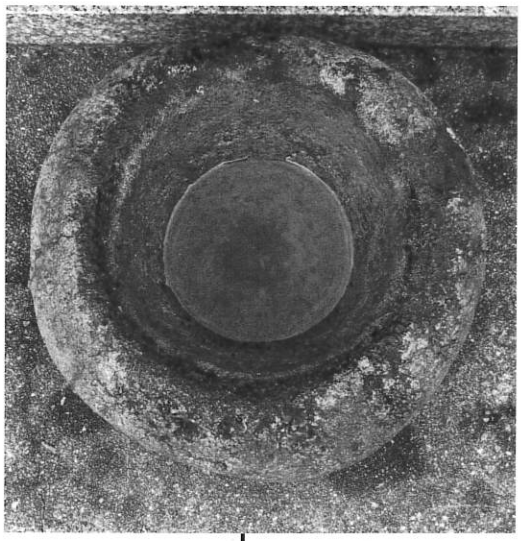
同　軸２　弥勒菩薩容貌

同　請花

同　軸２　弥勒菩薩蓮華座

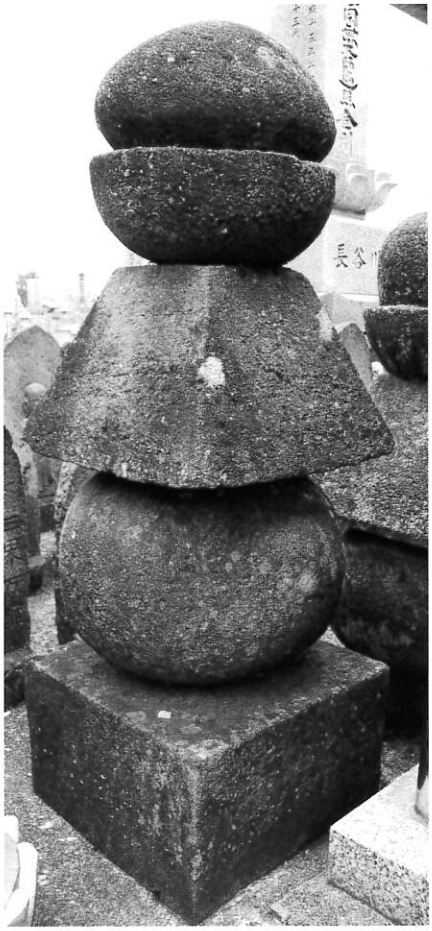
宝篋印塔２　饅頭形　東面（波涛文）

同　饅頭形・反花・基礎



同　請花～基礎
蓮弁形状

かろうと前手水鉢
前面に梵字バン



住職墓 2
五輪塔形

住職墓 2　台座
刻銘「実祐大和尚」

住職墓 3
五輪塔形

住職墓 4
板碑形
宝暦 7
「霊弥大竜之塔」

住職墓 5
円頂方柱形
明治 13 年
「大阿闍梨宥清大和尚位」

住職墓 9
舟形
「当山第七世
栄堂大和尚」

住職墓 14
舟形
「当山第五世
祐宝大和尚」

住職墓 18
舟形
「当山第九世
秀弁大和尚」

住職墓 19
舟形
「当山第十世
澹海大和尚」

住職墓 15
舟形
明治 15 年
「金沢遍照寺照岳大和尚」

住職墓 22
舟形
明治 11 年
「高野上珠院照永大和尚」

住職墓 22
顔拡大

住職墓 20
無縫塔
明治 38 年
「十六葉伝燈大阿闍梨
真照大和尚位」

住職墓 21
無縫塔
「当寺十二葉伝燈大阿
闍梨秀仙大和尚位」

2　宮路金山家墓所宝篋印塔

(1) 調査の目的　　石造宝篋印塔の年代・製作石工・製作の歴史的背景を解明するための記録調査
(2) 調査日　　平成 26 年（2014）9 月～平成 27 年 4 月
(3) 調査者　　古川知明（埋蔵文化財センター所長）
(4) 所在地　　立山町宮路　金山家墓所
(5) 種別　　宝篋印塔
(6) 年代　　嘉永元年(1848)
(7) 金山家の概要

常願寺川右岸扇頂部の立山町宮路には、加賀藩十村金山家が存在した。

金山家は、享保 7 年(1722)以降取高を集積し、天保 10 年(1857)までに 200 石、嘉永 6 年(1853)までに 300 石を超え有力化した。茂左衛門は、天保 6 年に流木見廻役を命ぜられた。嘉永 2 年には山廻列に任ぜられ、常願寺川流木見廻役を命ぜられた。万延元年(1860)には常願寺川筋川除御普請年勤方主附となった〔『立山町史』下巻〕。

立山町教育委員会が保管している『金山家文書』2426「先祖由緒一類附書上申帳」（安政 4 年（1857）11 月、茂左衛門（5 代兵蔵）作成）には、金山家由緒、初代から 4 代及び 5 代兵蔵の血縁者等の来歴等を記す。今回調査した宝篋印塔は、5 代兵蔵の造立である。

金山家は代々、富山市上滝の曹洞宗瀧脇山大川寺の檀家総代を勤めた。

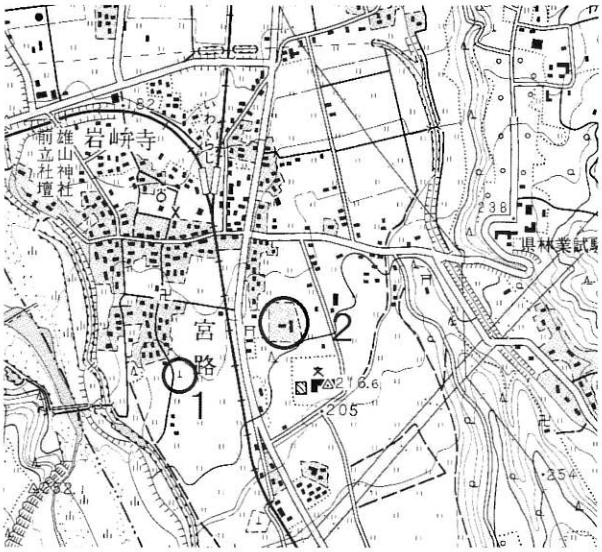


図 1　金山家墓所の位置
1 金山家墓所、2 金山家

(8) 調査概要

①金山家墓所の概要

宮路金山家墓所は、宮路集落の南端に所在する。

南北に長い台形状の敷地で、東西 18m南北 21mの広さである。墓所の西辺は南北方向の道に接し、そこが墓所入口となる。この道は岩峅寺と芦峅寺・立山を結ぶ立山信仰道である。

立山町教育委員会による岩峅寺石造物調査で、墓所内の石造物調査が行われた〔立山町教委編 2013〕。これによれば、墓所はC10 地点とされ、内外に 51 基の石造物が存在

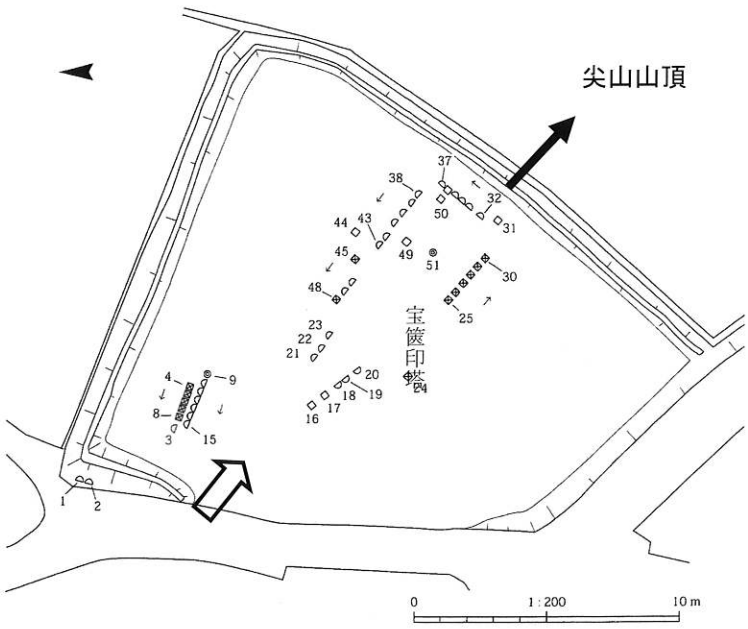


図 2　金山家墓所の配置（立山町教委 2013 を改変）

する。道沿い外縁に石仏 1 基と墓石 1 基、墓所入口左手に大型石仏 1 基(C10-3)、石仏 6 基、墓石 5 基、中世五輪塔水輪 2 基が集合する。墓所奥への通路はそこから南東方向へ延びる。通路中ほどの両側には、燈籠 2 基と六地蔵(C10-18～23)があり、奥へ行くと中央に宝篋印塔(C10-51)が立つ。この宝篋印塔をコの字形に囲み、金山家当主・室の個人墓石・燈籠 4 基が並ぶ。向かって右側列は明治以降、正面と左側列は江戸期である。江戸期の刻銘墓石は 10 基がある。

墓所入口と宝篋印塔を結んだ先には、中世期信仰遺跡で布倉山の別称のある尖山(標高 559.3m)の山頂があり、この山が墓所造営の際に、金山氏における信仰の象徴として意識されたのかもしれない。

②宝篋印塔概要（表 1）

宝篋印塔(C10-51)は、組合せ式の石造塔で、江戸後期の様式を備えた塔である。

本体高さは 10 尺 5 寸 2 寸（318.8cm）であり、その下に高さ 21 寸の石積基壇がある。

石塔の構成は、上から相輪、笠、塔身（5 段）、基礎（2 段）、基壇（4 段）の 13 段構成である（表 1）。石材は、基礎より上は全て立山天狗山石、基壇は安山岩である。造立年は嘉永元年（1848）で、願主は金山氏 5 代茂左衛門（兵蔵）である。石工は宮路村金山弥右衛門である。

③相輪　上から宝珠・上部請花・九輪・下部請花・伏鉢の順となる。これらは 1 石で造る。

宝珠は半球形で、上端は小さく尖る。

請花は、主弁 8 葉、間弁 8 葉の計 16 葉構成である。主弁は先端が丸く、弁脈をもつ。間弁は先端が三角で無文である。横断面は隅丸方形である。

九輪は、等間隔に置かれ、九輪の表面は平らである。上端輪の横断面はほぼ円形、下端輪の横断面は隅丸方形である。

反花は、主弁 8 葉、間弁 8 葉の 16 葉構成である。主弁は横長で、先端が丸く、弁脈をもつ。間弁は先端が丸く無文である。横断面は隅丸方形である。

伏鉢は、平面四角形で、断面は算盤玉形である。側面は無文である。

④笠　軒上 6 段、軒下 2 段である。

軒の直上 2 段は三角形に突出する段であり、軒上 3～6 段目は、階段状となり、上ほど小さい。

隅飾突起は 44.6°の角度で外側へ広がる。隅飾突起内面の文様は、輪郭を巻く弧下端が渦巻状になる。内部は無文であるが、やや粗いハツリ整形により細かい凹凸を表現する。隅飾突起上面は丸い。軒下は階段状に小さくなる。

表1　宝篋印塔規格

区分	部位	高さ		幅		備考
		寸	cm	寸	cm	
相輪	相輪	29	87.9	7.4	22.4	
笠	笠	6	18.2	21.4	64.8	軒上6段、軒下2段
塔身	軸1	7.5	22.7	7.8	23.6	正面に浮彫像、3面に五如来名
	反花	1.8	5.5	13	39.4	蓮弁に弁脈
	軸2	11.4	34.5	13	39.4	正面に「石字法華納塔」、3面に27人戒名刻銘
	請花	7	21.2	17.2	52.1	蓮弁に弁脈
	饅頭形	5	15.2	15	45.5	4面額内に祥雲文浮彫
基礎	反花	3.3	10.0	20.5	62.1	蓮弁に弁脈
	基礎	4.7	14.2	20.5	62.1	4面額内に波涛文浮彫
基壇	基壇1	8	24.2	25	75.8	4面に刻銘
	基壇2	8	24.2	30	90.9	
	基壇3	8.5	25.8	34.5	104.5	
	基壇4	5	15.2	39	118.2	
計		105.2	318.8			

⑤塔身　4石5段で構成する。上から軸1、反花、軸2、請花、饅頭形となる。反花とその下の軸2を1石で造る。

A　軸1　やや横長の方形石である。正面となる西面には、花頭形の額内を彫り込んだ中に、釈迦如来坐像を浮彫りする。如来は弁脈のある蓮台に坐す。額下には祥雲文浮彫5個を横一列に配置し、左右対称の図柄とする。この祥雲文にはベンガラとみられる赤彩が認められる。造立当初からのものかは不明である。

左面となる北面には「南無多宝如来／南無妙色身如来」、裏面には「十方　三世／南無離怖畏如来／一切　諸仏」、右面には「南無甘露王如来／南無広縛身如来」と楷書陰刻がある。

裏面の「十方三世　一切諸仏」は、曹洞宗回向後段の「略三宝」の第一節部分である。

それ以外の「南無」で始まる5つの如来名は、曹洞宗でいう「五如来」の名称である。

B　反花　軸2と1石で彫る。主弁8葉、間弁8葉の16葉構成である。主弁の先端は尖って反る。6本の弁脈をもつ。間弁の先端は尖って反り、弁脈をもつ。

表2　戒名者の位号内訳

区分	種類	人数	計
院号者	居士	6	12
	比丘尼	3	
	大姉	3	
位号者	信士	1	15
	信女	1	
	禅童子	2	
	禅童女	1	
	童子	6	
	童女	4	
計		27	

表3　宮路金山家宝篋印塔　刻銘者一覧

部位	位置	刻銘戒名	関係情報	忌日 和暦	忌日 西暦	忌日 月	忌日 日	備考
軸2	北面	月清院秋光常円居士	金山茂右衛門	享保12	1727			
	北面	本空院無相常心比丘尼	金山茂右衛門室					
	北面	大輪院一相円心居士	初代茂左衛門	明和2	1765			
	北面	香雲院梅屋芳林大姉	初代茂左衛門室	安永5	1776			金山家文書2426では■■村何右衛門娘
	北面	大雄院褐峯長天居士	2代茂左衛門　半次郎	享和3	1803			
	北面	柏操院梅香春林大姉	2代茂左衛門室	天明6	1786			金山家文書2426では中地山村久兵衛娘
	北面	青松院千峯柏樹居士	3代茂左衛門　増左衛門	文化10	1813	10	朔	丸彫石仏形墓石あり C10-38
	北面	吉祥院春山梅苗比丘尼	3代茂左衛門室	文政5	1822	閏正	19	丸彫石仏形墓石あり C10-39、金山家文書2426では西番村忠次郎娘
	東面	柏庭院梅山樹昌居士	4代茂左衛門　貞右衛門	文化12	1815	7	19	丸彫石仏形墓石あり C10-40、金山家文書2426では35歳没
	東面	松樹院昌室貞操比丘尼	4代茂左衛門室	天保2	1831	5	10	丸彫石仏形墓石あり C10-41,金山家文書2426では6月没、大田本江村四郎左衛門娘
	東面	見性院一応禅徹居士	5代茂左衛門　兵蔵	明治22	1889	4	24	宝篋印塔造立願主、角柱形墓石あり C10-29
	東面	自性院顧喚微笑大姉	5代茂左衛門室	明治10	1877	12	5	角柱形墓石あり C10-30、金山家文書2426では大田本江村善左衛門娘
	南面	梅屋春香信女	梅香春林信女					舟形墓石あり C10-35
	南面	徳仙童子						
	南面	春光童子						
	南面	玉梅童女						
	南面	霜雲童女						
	南面	幻影童子						
	南面	桂芳童女						
	南面	夏葉童女						
	南面	幻泡童子						
	南面	玉仙童子						
	南面	紅葉禅童子						
	南面	本覚童子						
	南面	玉瑞禅童子		天保13	1842	10	7	丸彫石仏形墓石あり C10-42
	南面	儀観■道信士						
	南面	一応了心禅童女		弘化3	1846	7	27	丸彫石仏形墓石あり C10-34　墓石では覚応
基壇	北面	禅徹居士	見性院一応禅徹居士					願主
	東面	弥右衛門	石工名　金山弥右衛門					宮路村に工房
	南面	大見叟詮	大川寺28世　大見悟庵					

C　軸２　　やや横長の方形石である。四面には刻銘がある。銘文は陰刻で彫られる。

正面となる西面は、「無縫塔様争払塵埃／石字法華納塔／一見見觸心花時間」と３行に趣意が書かれ、中央列の文字が大きい。「石字」とは「一石一字」の略で、小石１個に経文１字を墨書きする礫石経のことである。ここでいう経文は法華経である。

残る３面には戒名が羅列されている。左面は院号者８人、裏面は院号者４人、右面は15人の非院号者15人の計27人の戒名者である。その位号別内訳は、北面及び東面の計12名はすべて院号者である（表2)。先に見たように、金山家初代からの当主と室である（表3)。代順に右回りで書かれる。末尾となる南面の15人は、童子・童女が10人と多く37%を占める。禅童子・禅童女を加えると13人となり48%を占める。すべて非院号者であり、その肉親であろう。これらは当主・室の死去した子などと思われる。金山家文書「安政四巳年十一月先祖由緒一類附書上申帳」により確認できるのは院号者のみである。裏面となる東面は、北面のように８人の戒名の記載が可能であるが、右寄りに４人が書かれ、左側半分が空白となっている。この空白部分には、字幅に合わせ、墨による縦線が６本書かれており、３人分の刻銘場所が確保されている。これは、金山家で死者が出た場合戒名を追記できるようにしたものである。墨線は部分的に残る。

D　請花　　１石で造る。主弁２段×８葉=16葉で、上段は間に間弁を置き、計24葉である。上段の弁は横長である。６本の弁脈をもつ。弁の先端はわずかに突出する。下段の弁は上段に比べ高さ幅とも大きい。弁先端は尖ってやや突出する。弁上端は丸く、弁縁辺のみ厚い。弁脈は６本で、幅広い。

E　饅頭形　１石で造る。平面形は四角形で、側面は断面半円形で丸い。側面は４面ともに額内に祥雲文を浮彫する。祥雲文の構図は４面ともに異なる（表4)。

表3　饅頭形祥雲文意匠構成

面	祥雲個数	詳細
西（正面）	11	左3＋中央5＋右3の3ブロック、尾右方向
北	4	横一列につなぐ、尾1右方向
東	3	横一列、左尾左、中・右尾右
南	6	上段4が横一列、尾は左右。下段2一列、尾は左右

⑥基礎　２段で、上部の反花とその下の方形石を１石で造る。

反花は、主弁２段×８葉=16葉で、下段は間に間弁を置き、計24葉である。上段の弁は下段に比べ大きい。６本の弁脈をもつ。弁の先端は突出して反る。弁端には縦長の溝が入る。

表4　基礎波涛文意匠構成

面	波	波頭（分流）	飛沫	備考
西（正面）	2	2（3＋4）	13	
北	2	3（5＋3＋6）	10	
東	2	3（7＋5＋6）	3	
南	2	2（3＋4）	4	飛沫に穴なし3

方形石の側面は４面ともに、有段額内に波涛文を浮彫する。波涛文の構図は４面ともに異なる（表5)。北面の波頭は、先端を丸く巻き込む表現ではなく、先端を円形文とし、中央に丸い穴をあける表現で他の３面と異なる。

表5　基壇板石規格・刻銘

段	番号	位置	長		高		厚		刻銘種類	備考
			尺	cm	尺	cm	尺	cm		
1段目	1	西面	19.25	58.3	8	24.2	6.7	20.3	普回向	3行
	2	北面	18.3	55.4	8	24.2	5.25	15.9	年号	嘉永元(1848)
	3	東面	7.1	21.5	8	24.2	3.4	10.3	年号・経緯	5代造立
	4	東面	12.65	38.3	8	24.2	5.6	17.0	石工名	宮路村弥右衛門
	5	南面	19.3	58.5	8	24.2	5.75	17.4	普回向	1行
2段目	6	西面	25.1	76.1	8	24.2	3.3	10.0		
	7	北面	26.9	81.5	8	24.2	4.9	14.8		
	8	東面	25	75.8	8	24.2	3.1	9.4		
	9	南面	26.6	80.6	8	24.2	4.9	14.8		
3段目	10	西面	29.4	89.1	8.5	25.8	5.3	16.1		
	11	北面	29.2	88.5	8.5	25.8	7.3	22.1		
	12	東面	27.3	82.7	8.5	25.8	4.9	14.8		
	13	南面	29.6	89.7	8.5	25.8	5.1	15.5		
4段目	14	西面	23.5	71.2	5	15.2	12.6	38.2		
	15	西面	15.5	47.0	5	15.2	10.3	31.2		
	16	北面	15.7	47.6	5	15.2	計測不能			
	17	東面	16.2	49.1	5	15.2	12.9	39.1		
	18	東面	22.6	68.5	5	15.2	10.9	33.0		
	19	南面	15.3	46.4	5	15.2	計測不能			
		平均	20.3	61.4						

⑦基壇　４段からな

る切石組基壇である。1段目は5石、2～3段目は4石、4段目は6石の板状の切石で構成される。4段目は高さが低く、下端は割玉石基壇の上面のある玉石の形に整えられている。切石数は計 19 石となるが、1段目の1石(№3)は欠落し、玉石2石を埋めて補っており、18石が残る。

切石単体の長さは、最小7.1尺(21.5cm)から最大29.6尺(89.7cm)である。平均は20.3尺(61.4cm)である。小口面は幅3.1尺～12.9尺とばらつきが大きい（表5)。

切石表面の整形は、ビシャン叩きで仕上げられている。表面には簾状の跡が残る。

基壇内部は中空である。3，4段目が土で埋まり、上面はほぼ平らである。土の上部には、安山岩小～微小剥片が多く認められる。この剥片は基壇構築時の整形時に生じた剥片と考えられる。

また越中瀬戸焼の鉄釉椀の底部破片が出土した（p48中写真)。年代等は不明であるが、江戸時代である。

このほか、10cm大の円礫もわずかに存在するが墨書などの文字が認められない。それ以下の土の内部は不明である。切石№3は礫石経投入口の蓋石で、その表面には径4寸の円形取手を彫り込む。

⑧基壇刻銘　基壇1段目には楷書陰刻による刻銘がある。

刻銘の内容は、正面となる西面には曹洞宗「普回向」文を5文字×4行で彫る。文字はやや大きめで、深く彫る。

左面には「維時嘉永／元龍舎戊／申仲秋善／法日高顕／于玆者也／金山氏／禅徹居士拝立」とあり、嘉永元年（1848）禅徹居士が造立したことを示す。禅徹居士は、軸2東面の刻銘にある「見性院一応禅徹居士」のことで、5代茂左衛門兵蔵である。

裏面には「石工当所／弥右衛門／盥手焼香／龍首額〔石＋來〕剡／之者也」とあり、製作した石工名を記す。「盥手焼香／龍首額〔石＋來〕剡」は、弥右衛門の技術評価であり、盥・焼香の容器に龍の頭や額を刻むほど精緻で巧みな者であるという意味であろう。

弥右衛門はこの墓所がある宮路村に工房を持つ石工で、姓は金山である。弥右衛門の墓は、岩峅寺宿坊千光坊墓地に存在しており〔立山町教育委員会編2012〕、千光坊の血縁者であった可能性がある。右面には「金山氏為／先祖代々精霊／菩提及現身滅／罪生善二世安／楽■■蓮■法／花全罪於石上／〔承？＋頁〕満巻日礼拝／彼罪修善奉行／宰然■鎮這筐／塔埋以求遺将／来者也／当■主／大川二十八世大見叟詮誌」とあり、金山氏の供養理由を示す。

先祖代々の霊に対し、宝篋印塔内に経文を埋めて供養し、満願日まで礼拝することで供養が叶うという趣旨である。

末尾には檀那寺であった大川寺の28世住職大見叟詮が謹誌したことが記される。住職名は現在「大見悟庵」あるいは「悟庵大見」和尚と伝えており〔『大山町史』〕、文字が異なる。石塔の文字も読みづらい。

(9)考察

①宝篋印塔造立の背景について

本石塔が造立された経緯については、軸2及び基壇刻銘により判明する。

本石塔を造立したのは、金山家5代茂左衛門兵蔵である。

金山家は、代々曹洞宗大川寺の檀家総代としての立場にあったという。

前記「先祖由緒一類附書上申帳」に基づけば、兵蔵が本塔を造立した嘉永元年は兵蔵が40歳の時である。

本塔では、金山家初代からの代々の戒名を列記していることから、兵蔵は、先祖供養の目的で本石塔を造立したと推定される。嘉永元年は、父（4代貞右衛門）の死去後33年、母の死去後26年を経過していることから、父母に対する年忌供養として造立したものではないことがわかる。それ以前の

先祖についても同様に年忌供養該当者がいないことから、
それ以外の理由が推定される。

銘文中には「高顕于茲者也」とあるが、「高顕」に並ぶ者であるということであろうか。「高顕」なる人物の素性は不明である。

これらを含め、銘文は大川寺大見住職が兵蔵の依頼により謹誌したと考えられる。銘文の作製にあたり大見住職の大きな意向が働いていると思われる。

以上によるが、直接的な造立目的は不明である。強いてあげるとすると、40 歳は「初老」の年であり、父である 4 代貞右衛門が 35 歳の若さで死去していたことに思いをはせて、造立に至ったと推定しておく。

②製作石工について

本石塔の製作石工は、宮路村に工房をもつ石工金山弥右衛門である。

弥右衛門の名は、安政 6 年「新川郡諸商売取調理書上申帳」の高野組「石工」項 6 人の中に「宮路岩峅村　弥右衛門」と見える〔立山町教委編 2012〕。この年は、安政の飛越大地震の翌年で、地震の際には常願寺川に土石流が流れ込み、左岸側中流に大被害が生じた。常願寺川左岸に集住していた石工たちの動向については記録がなく不明であるが、右岸側の石工は大丈夫であったようである。

弥右衛門については、『立山信仰宗教村落―岩峅寺―石造物等調査報告書』において以下のように紹介されている。

弥右衛門における最初の刻銘品は、天保 14 年（1843）年宮路導引地蔵であり、馬瀬口村甚右衛門ら 4 人での共作品である。この時点では弥右衛門の名は末席であることから若手か師弟関係の感がある。嘉永 2 年（1849）には金山の姓を付けた笠付円盤型石仏を製作しており、相当の技術を要する域に達していた。文久 3 年（1863）には川向いまで腕の良さが知れわたっていたとみられ、上滝黒田家墓地に宝篋印塔を建立している。また明治時代の晩年には、宮路岩峅村百姓総代を勤めた。

弥右衛門の在銘品はこの報告書以外にも明治 35 年（1902）のものがあり、これが最後の在銘品である。

弥右衛門の墓所は、金山家墓所の北 100m のところ（立山町調査 C5-38）に所在しており、戒名は「石心仏光上座」である。子年とあり、これが没年の干支とみられることから、明治 45 年（大正元年　1912）が没年である。80 歳代の高齢であるが、一代であろう。

弥右衛門の製作した石造物の種類は、石仏・宝篋印塔・墓石がある。石仏では笠付四角形が多い。祥雲文・波涛文の文様を多用し、馬瀬口村石工中川甚右衛門〔古川 2011〕の系統であると思われる。

(10) 結語

本石塔は、嘉永元年（1848）に金山家 5 代茂左衛門兵蔵（戒名：見性院一応禅徹居士）が造立したものである。金山家先祖の戒名を列記することから、先祖供養を目的として造立したと推定されるが、造立した年は誰の年忌にも当たらず、直接的な造立の理由は不明である。造立にあたっては、金山家の檀那寺である曹洞宗大川寺 28 世住職大見悟庵（叟詮）和尚が謹誌していることから、大見住職が造立供養を行ったものと推定される。

この石塔は、数少ない宮路村石工金山弥右衛門が製作した技量の高い石造物の一つであり、ほぼ完全な形で遺存する貴重な宝篋印塔であるといえる。

金山家宝篋印塔刻銘（翻刻）

〔軸１〕

【西面＝正面】
釈迦如来浮彫像

【北面】
南無多宝如来
南無妙色身如来

【東面】（略三宝　第一節）
十方　三世
南無離怖畏如来
一切　諸仏

【南面】
南無甘露王如来
南無広縛身如来

〔軸２〕

【西面＝正面】
無縫塔様争仏塵埃
石字法華納塔
一見聞觸心花時間

【北面】（戒名８人）
月清院秋光常円居士
本空院無相常心比丘尼
大輪院一相円心居士
香雲院梅屋芳林大姉
大雄院襠峯長天居士
柏操院梅香春林大姉
青松院千峯柏樹居士
吉祥院春山梅苗比丘尼

【東面】（戒名４人）
柏庭院梅山樹昌居士
松樹院昌室貞操比丘尼
見性院一応禅徹居士
自性院顧喚微笑大姉

【南面】（戒名１５人）
梅屋春香信女　徳仙童子
春光童子　玉梅童女
霜雲童女　幻影童子
桂芳童女　夏葉童女
幻泡童子　玉仙童子
紅葉禅童子　本覚童子
玉瑞禅童子　儀観■道信士
一応了心禅童女

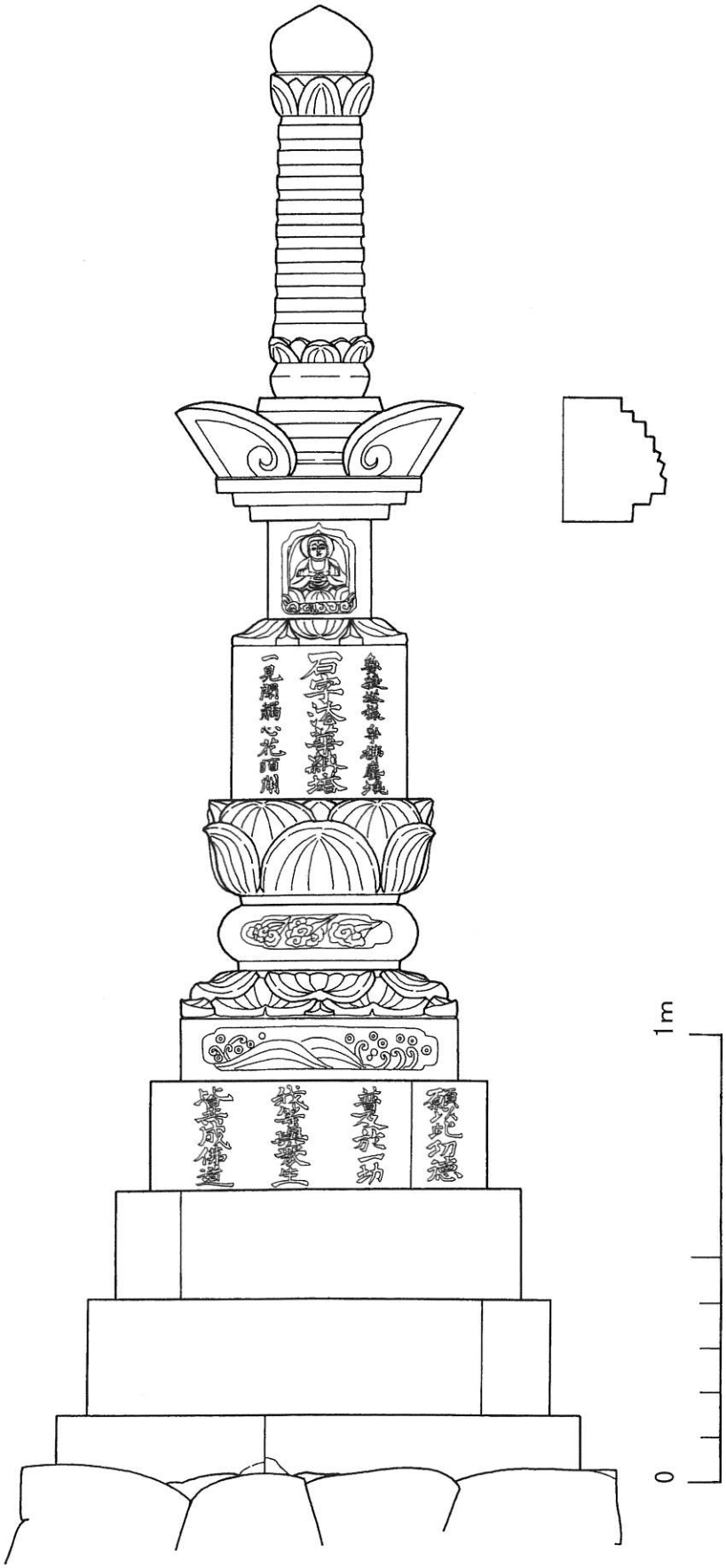
〔基壇〕

【西面】（普回向）
願以此功徳
普及於一切
我等与衆生
皆共成仏道

【北面】（年号造立者）
維時嘉永
元龍舎戊
申仲秋善
法日高顕
于茲者也
金山氏
禅徹居士拝立

【東面】（石工）
石工当所
弥右衛門
盥手焼香
龍首額〔石＋来〕刻
之者也

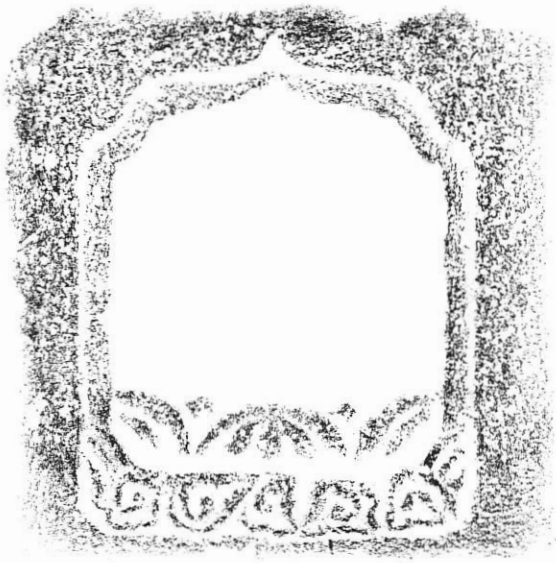
【南面】（願意・謹誌者）
金山氏為
先祖代々精霊
菩提及現身滅
罪生善二世安
楽■■蓮■法
花全罪於石上
〔承？＋頁〕満巻日礼拝
彼罪修善奉行
宰然■鎮這篋
塔埋以求遺将
来者也
当■主
大川二十八世大見叟詮誌



宝篋印塔　実測図（1/15）

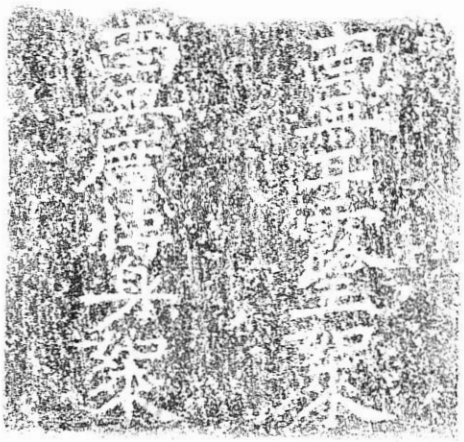
笠　隅飾突起　拓影（1/5）

軸１　正面　像実測図（1/3）



軸１　正面額部　拓影（1/3）

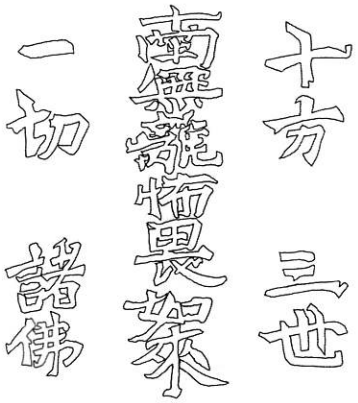
軸１　正面　像　拓影（1/3）



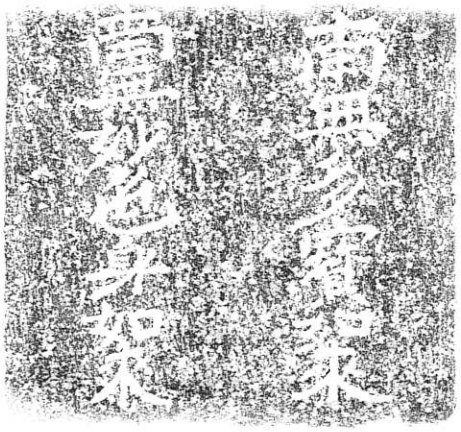
軸１　右面（南面）　拓影（1/4）

同左　実測図

軸１　裏面（東面）　拓影（1/4）

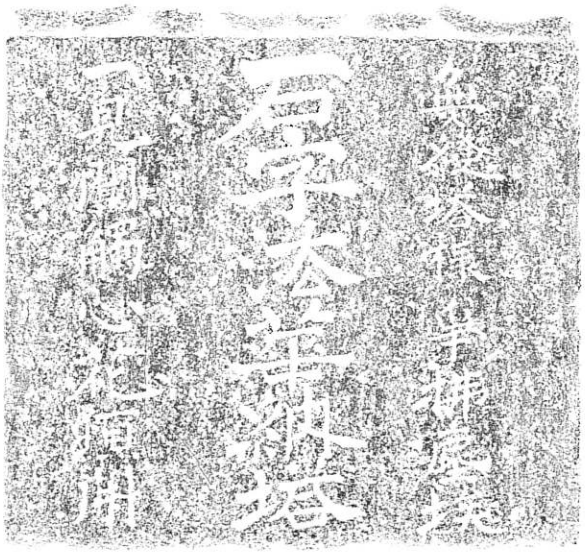


同左　実測図

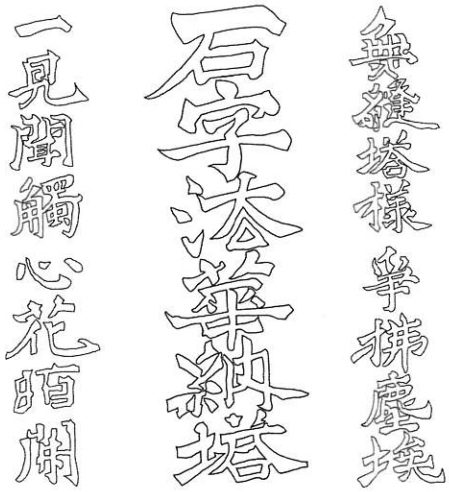


軸１　左面（北面）　拓影（1/4）

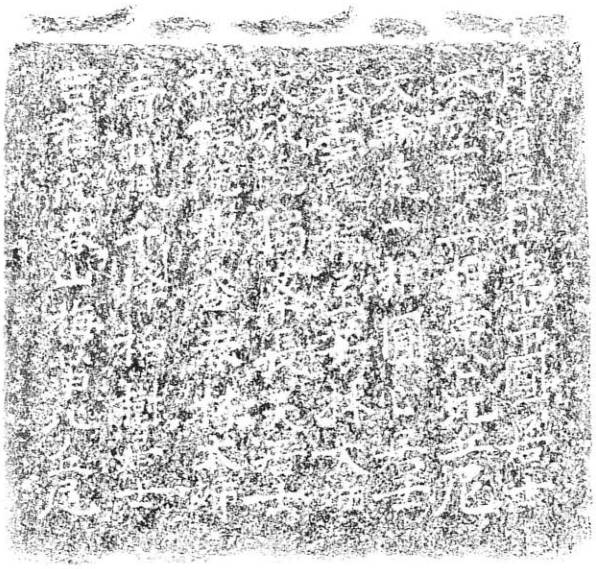
同左　実測図



軸２　正面（西面）　拓影（1/5）

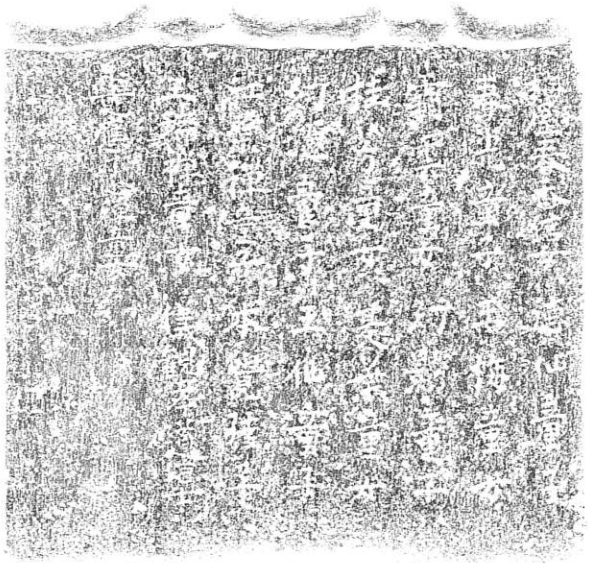


同左　実測図

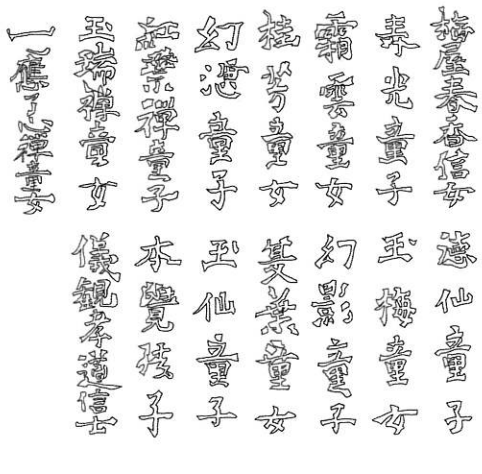


軸２　左面（北面）　拓影（1/5）

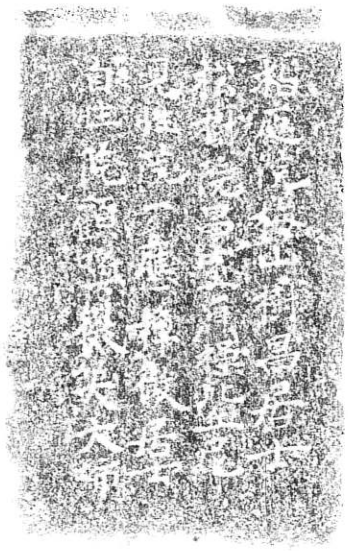
同左　実測図



軸２　右面（南面）　拓影（1/5）

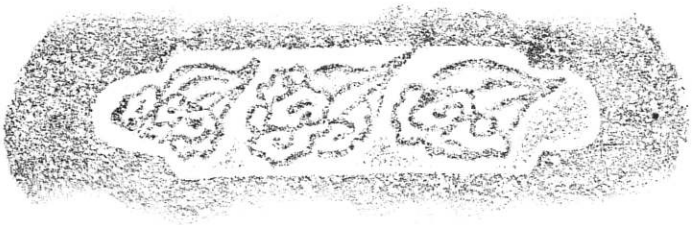


同左　実測図

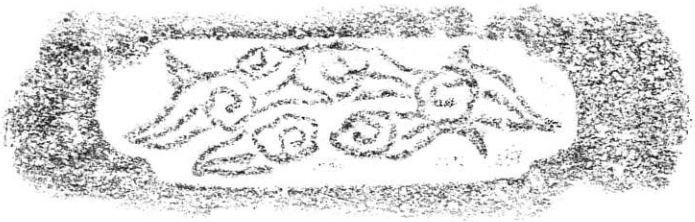


軸２　裏面（東面）　拓影（1/5）

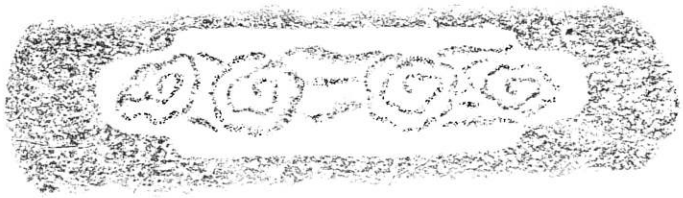
同左　実測図



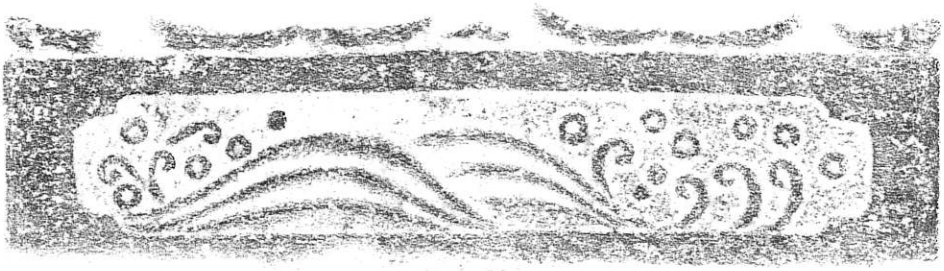
饅頭形　正面（西面）　拓影（1/5）



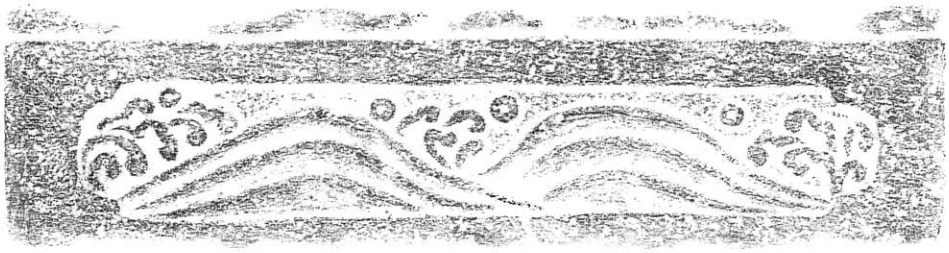
饅頭形　右面（南面）　拓影（1/5）



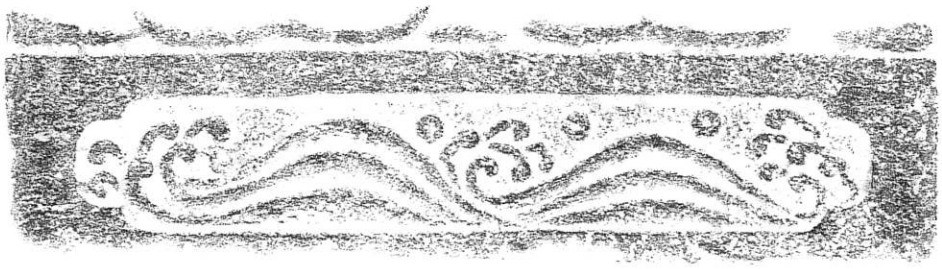
饅頭形　左面（北面）　拓影（1/5）



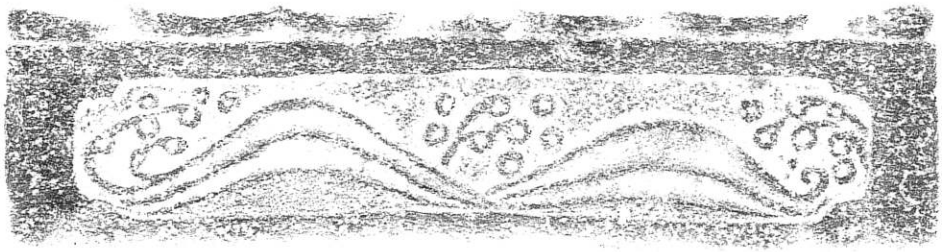
基礎　正面（西面）　拓影（1/5）



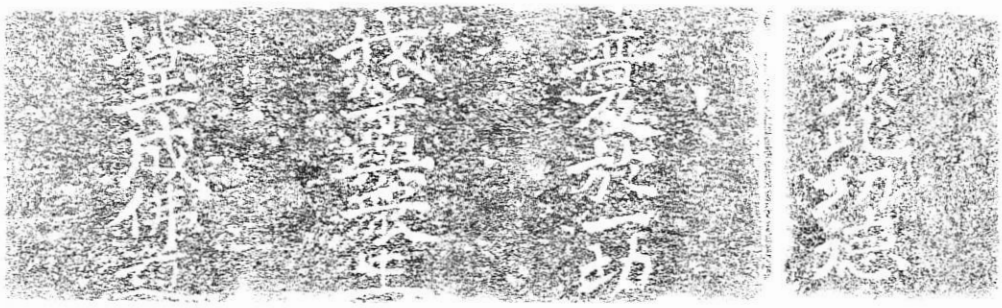
基礎　右面（南面）　拓影（1/5）



基礎　裏面（東面）　拓影（1/5）

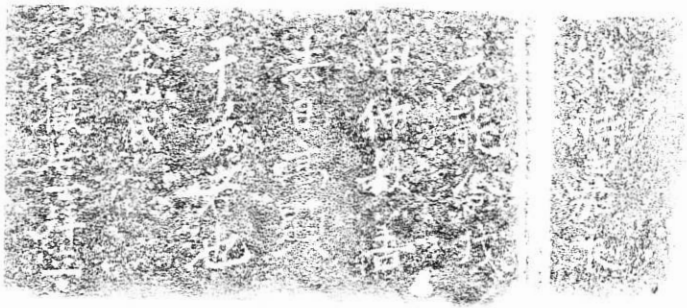


基礎　左面（北面）　拓影（1/5）



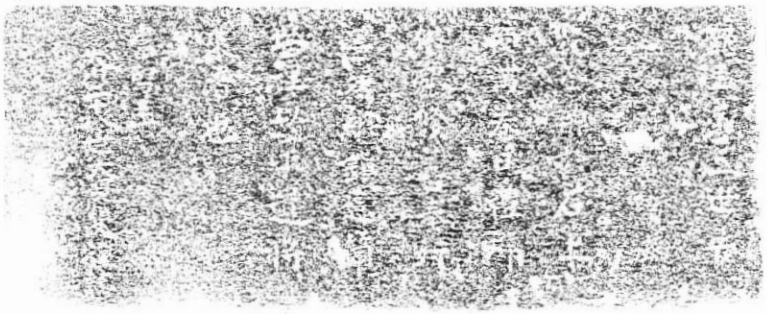
基壇
左正面（西面）
刻銘拓影（1/6）

同上　実測図



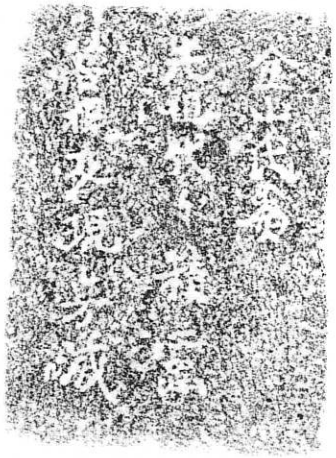
基壇　左面（北面）
刻銘拓影（1/6）

同上　実測図



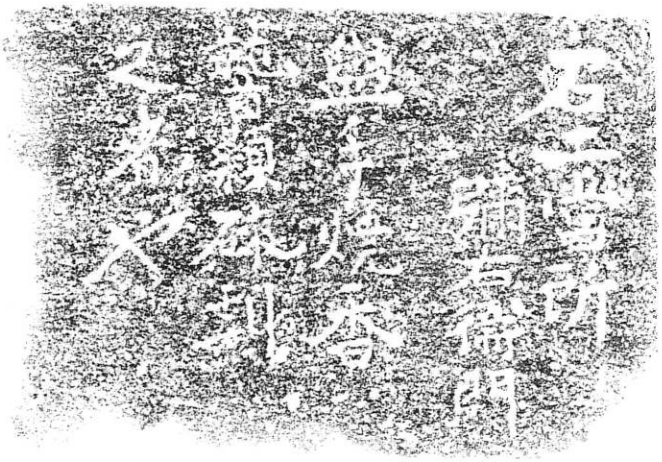
基壇　右面（南面）
刻銘拓影（1/6）

同上　実測図



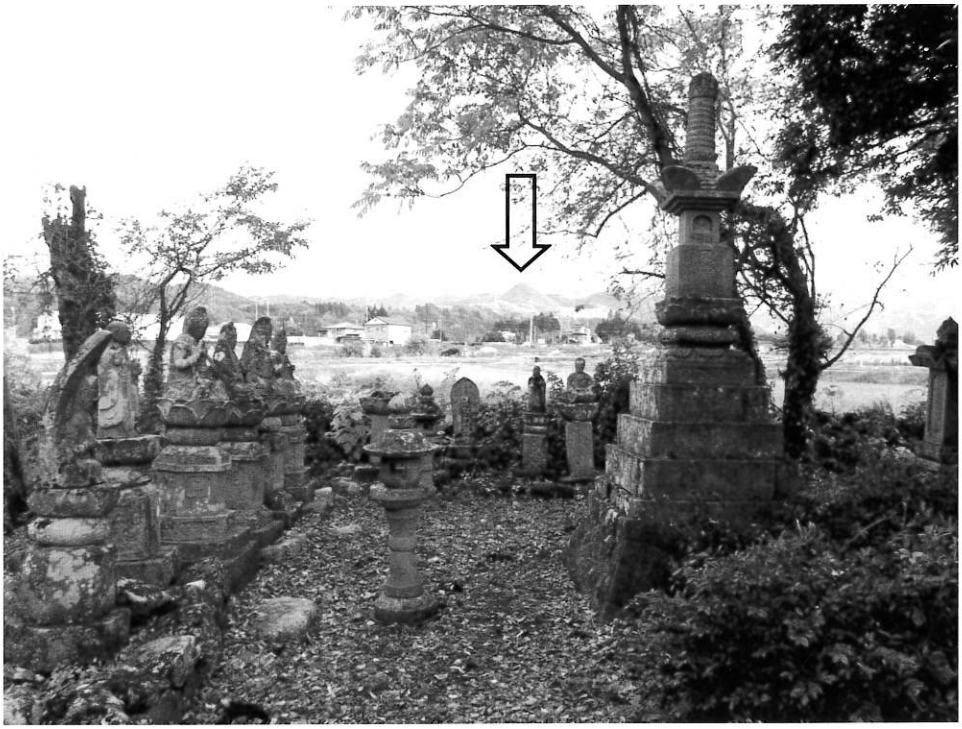
基壇　裏面（東面）刻銘拓影（1/4）

同左　実測図



基壇　裏面（東面）刻銘拓影（1/4）

同上　実測図



金山家墓地（北西から）
矢印の先は尖山（布倉山）

金山家墓地宝篋印塔（北から）

金山家墓地宝篋印塔（東から）

相輪　宝珠・上部請花

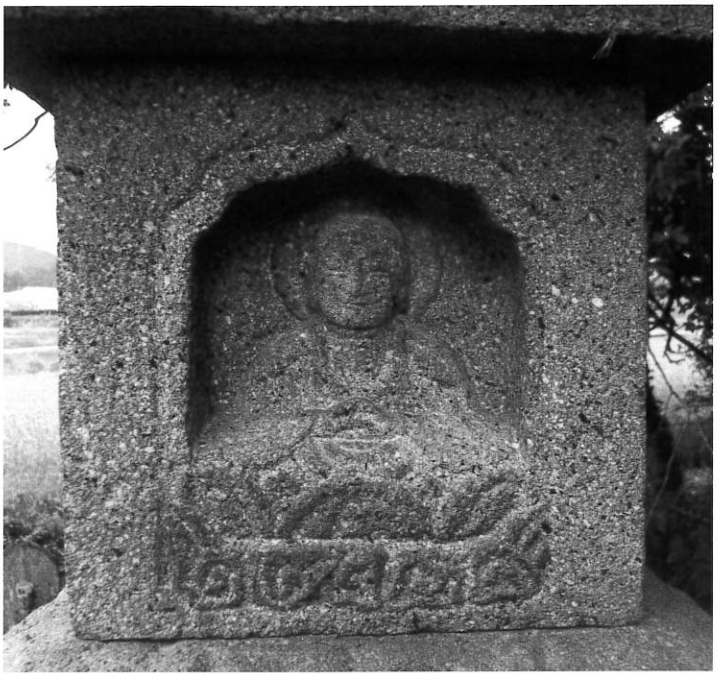
笠（西から）

相輪　下部請花・伏鉢

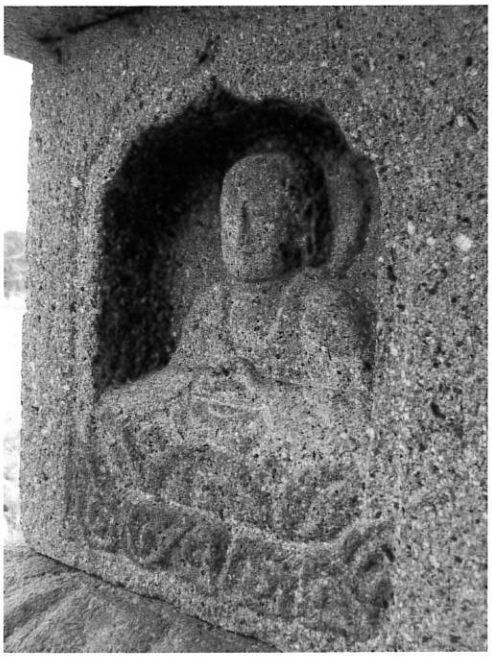
笠　隅飾突起

相輪

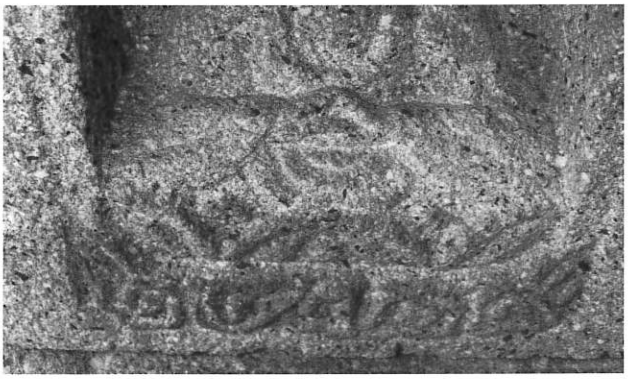
笠　階段状屋根部



軸１　正面阿弥陀如来浮彫



同左　（右斜めから）

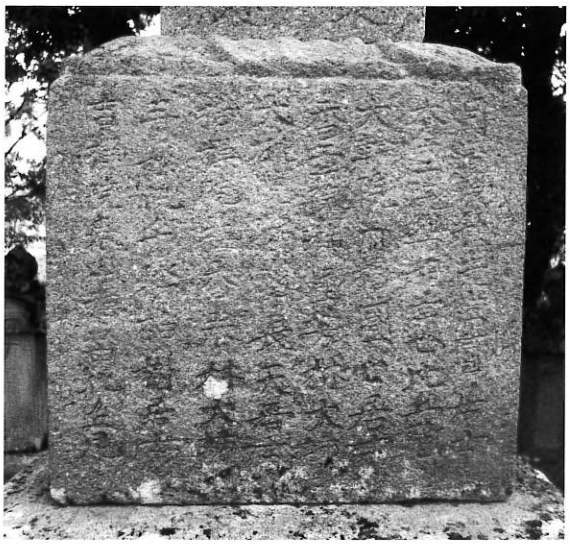


軸１　正面阿弥陀如来浮彫　印～蓮台

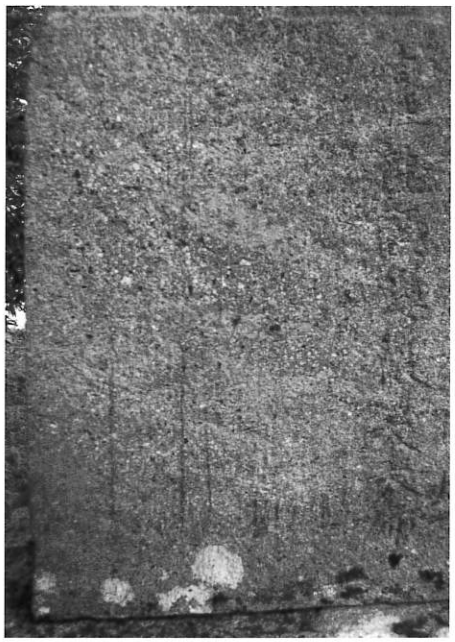
同左　頭部・頭光

軸１　裏面（南面）刻銘

軸２　正面（西面）刻銘



軸２　左面（北面）刻銘



軸２　裏面　割付線（墨書）

軸２　裏面（東面）刻銘

軸２　右面（南面）刻銘

請花（東面）

饅頭形　正面（西面）祥雲文浮彫

饅頭形　右面（南面）祥雲文浮彫

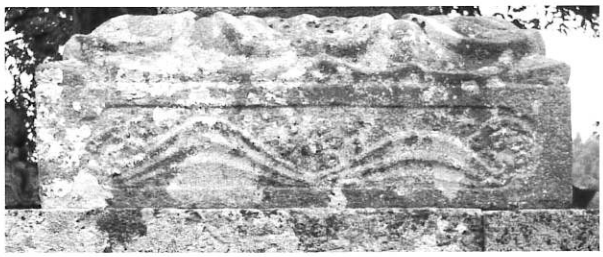
饅頭形　左面（北面）祥雲文浮彫

饅頭形　裏面（東面）祥雲文浮彫

基礎　正面（西面）波涛文浮彫

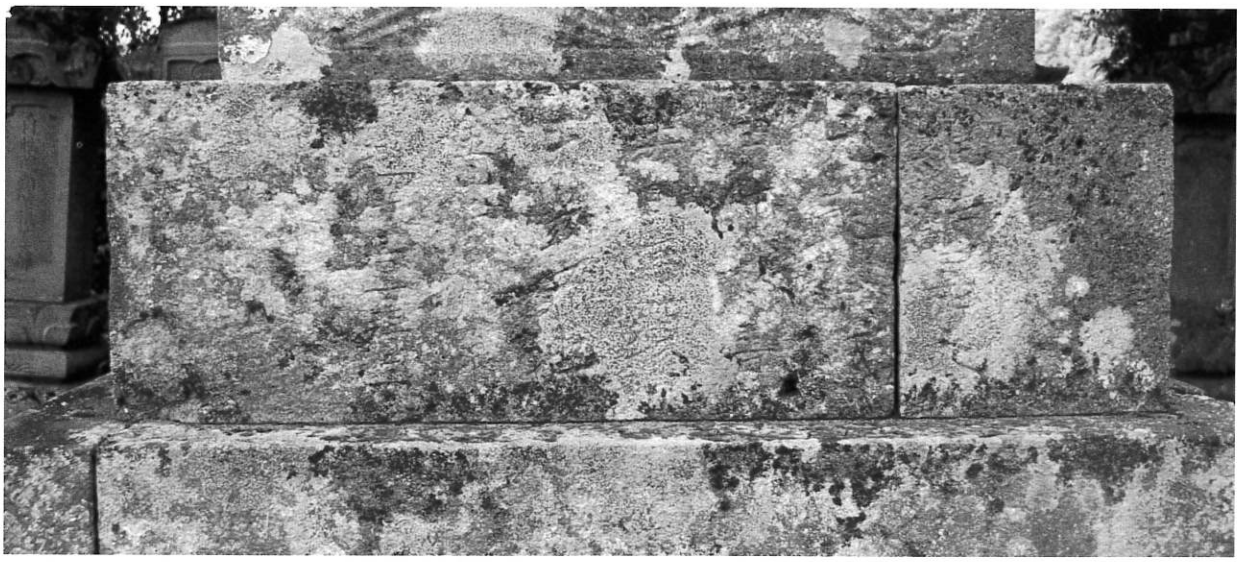
基礎　裏面（東面）波涛文浮彫

基礎　右面（南面）波涛文浮彫

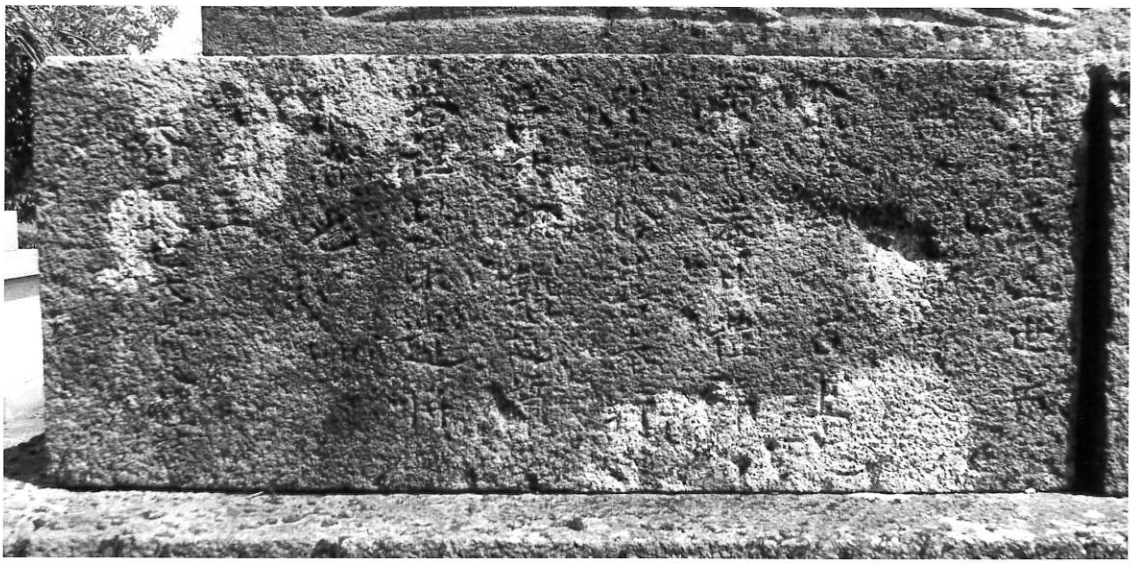


基礎　左面（北面）波涛文浮彫

基壇　正面（西面）刻銘



基壇　左面（北面）刻銘



基壇　右面（南面）刻銘

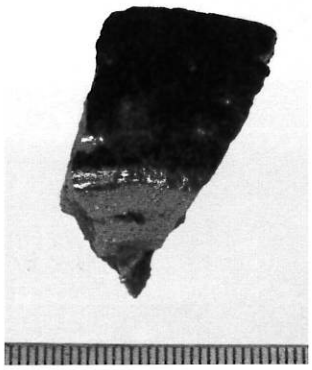
基壇　右面（南面）右刻銘

基壇　裏面（東面）左刻銘

基壇東面　礫石経投入口　補修痕

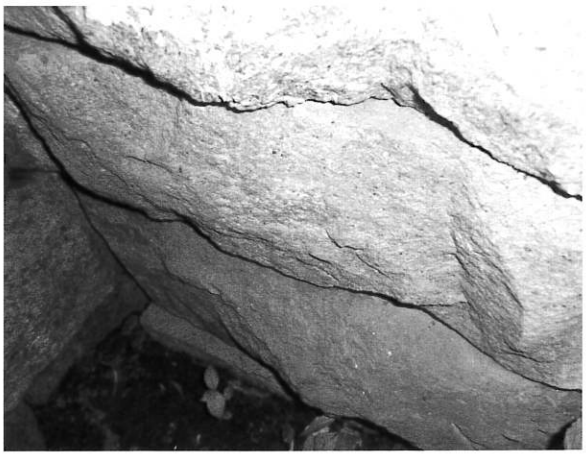
基壇東面　礫石経投入口　復元後

基壇礫石経投入口蓋石
（基壇内部に転落）



基壇内部　堆積土上部出土
越中瀬戸

基壇内部　土壌堆積状況
（手前は礫石経投入口蓋石）



基壇内部　石材加工状況

基壇内部　堆積土上部出土の礫片
（安山岩剥片）

Ⅱ　巡礼塔

1　芦峅寺明念坂巡礼塔

(1) 調査の目的　　常願寺川石工北野甚蔵製作石造物の記録調査
(2) 調査日　　平成 27 年（2015）10 月
(3) 調査者　　古川知明（埋蔵文化財センター所長）
(4) 所在地　　中新川郡立山町芦峅寺（明念坂）
(5) 種別　　巡礼塔
(6) 年代　　天保 4 年（1833）
(7) 既往の調査

明念坂は、立山町芦峅寺閻魔堂から布橋西詰に至る坂道の呼称である。富山県[立山博物館]が行った『立山中宮寺跡石造物分布調査報告』〔富山県[立山博物館]編 1993〕において、明念坂(D 地区)には中世から近世の石造物 87 基が確認されている。調査した巡礼塔は、明念坂の下方崖際に存在し、D－4 として報告されているものである。

報告内容によれば、角石標で、各面に梵字・刻銘があり、解読が行われている。背面下部は土に埋もれ未解読である。造立年は天保 2 年と報告されているが、4 年の誤りである。

図 1　明念坂の位置(1：25,000)

(8) 調査概要

この石塔は、方柱の頂部が丸くなる円頂方柱形型式の石塔を本体とし、下に方形に加工した台石を置く。

本体高さは 34 寸で、方柱部高さ 32 寸、頂部高さ 2 寸である。石材は安山岩である。

表1　巡礼塔規格

区分	高		幅		奥行		備考
	寸	cm	寸	cm	寸	cm	
本体	34	103.0	12.5	37.9	11	33.3	4面に刻銘
台座	8	24.2	19.3	58.5	13以上	39.4以上	奥が土に埋まる

本体の四側面には、それぞれ刻銘がある。銘文は陰刻で彫る。

正面は、上に三仏の梵字を置き、中央に 5 つの霊場名称を並記、下に霊場巡拝供養塔であることを記す。巡礼を行った観音霊場は、日本百観音霊場に越中当国の三十三観音霊場を加えた 133 カ所である。

【正面】
キリーク(阿弥陀如来)　西国
ユ(勢至菩薩)　当国
サ(聖観音菩薩)　四国
秩父
坂東
霊場巡拝供養塔

【左側面】
ア(日光菩薩)シャ(月光菩薩)カ(弥勒菩薩)　深秀
和尚菩提
寺田村重兵衛母ヨソ志入

【裏面】
教覚坊
ア(大日如来)　本願行者
教応謹志カ
想太夫カ

【右側面】
三界万霊　天保四巳星八月吉旦敬白

本願としての巡礼を行った行者は、教覚坊教応と想太夫とみられる。この時期の教覚坊住職は 39 代龍応であり、龍応は天保 7 年まで務めている（「明治六年二月由緒書上帳　越中国立山芦峅寺事　元東神職」〔山崎編 1991〕）。教応は教覚坊の住僧か。想太夫は俗名で僧籍者でなく、従者あるいは教覚坊や教応の血縁者か。

この石塔を造立したのは、寺田村重兵衛母ヨソの寄進によるもので、深秀和尚の菩提供養のためである。深秀和尚は大仙坊第 45 代住職で、44 代円清の亡くなった文政元年 8 月から同 9 年 6 月死去するまで務めた（「明治六年二月由緒書上帳　越中国立山芦峅寺事　元東神職」〔山崎編 1991〕）。大仙坊墓地にある舟形墓石（前記調査 A-120）により年代が確認できる〔富山県［立山博物館］編 1993〕。よって深秀和尚没後七回忌に造立を発願し、1 年後に造立を終えたと推測される。教覚坊の住僧 2 人の巡礼終了時期との関係があったのかもしれない。寺田村重兵衛母ヨソは、深秀和尚の実母と推定されており、教覚坊は大仙坊から出た坊家という[1]。

この石塔の裏面には大きく阿字が刻まれている。阿字を囲む月輪は左右が切れている。よって、この石塔は阿字観碑としての性格も併せ持つといえる。

(9) 考察

①石塔製作石工の推定

本巡礼塔には、石工名の刻銘はないため製作石工は不明だが、それを知る手がかりがある。

明念坂上の閻魔堂境内には、阿字観碑が 1 基存在する。この阿字観碑は、文政 13 年(1830)に造立され、後天保 8 年(1837)芦峅寺一山に貢献した真言僧龍淵の墓所に転用されたものである。阿字観碑の製作石工は、善名村北野甚蔵である〔富山市教委 2013, 古川 2013b〕。

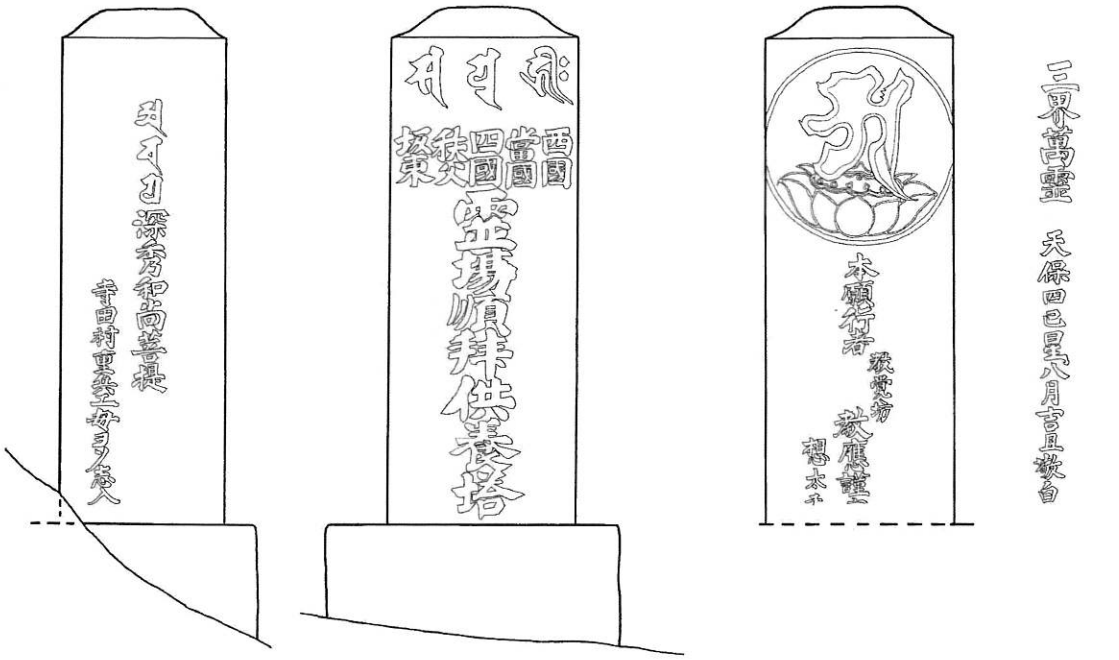
この阿字観碑の阿字部分（図 2)が、本巡礼塔の阿字部分と一致する。周りを囲む月輪の左右が一部本体からはみ出し切れているほかは完全に一致している。実測図では表現していないが、蓮花表面の細部文様も一致がみられる。よって同一の図柄を下絵としたことがわかる。

この二者の年代差は 3 年であり、石工甚蔵の芦峅寺における活動期間内（文化～嘉永年間）〔古川 2013b〕であることからみても、本巡礼塔の製作石工は甚蔵である。

②巡礼塔に見る仏のあり様

本巡礼塔においては、3 面に梵字種子の組み合わせ、残る 1 面に「三界万霊」の語句が使われている。正面の梵字種子は阿弥陀三尊で、主尊阿弥陀如来、左脇侍聖観音菩薩、右脇侍勢至菩薩である。左側面の三尊は、縦に並び、日光・月光菩薩と弥勒菩薩を組み合わせている。日光・月光菩薩は通常薬師如来の脇侍であるが、未来仏の弥勒菩薩を主尊とし、苦しみの闇を消す日光菩薩と、優しい慈しみの心で煩悩を消す月光菩薩を組み合わせ、深秀和尚への供養の気持を表したものと理解されよう。

注 1　佐伯史麿氏「WEB 宿坊立山静寂庵」のうち「想いのまにまに」平成 15 年 1 月 18 日掲載内容に基づく。



【左側面】　【正面】　【裏面】　【右側面】

図１　明念坂巡礼塔実測図（1:15）

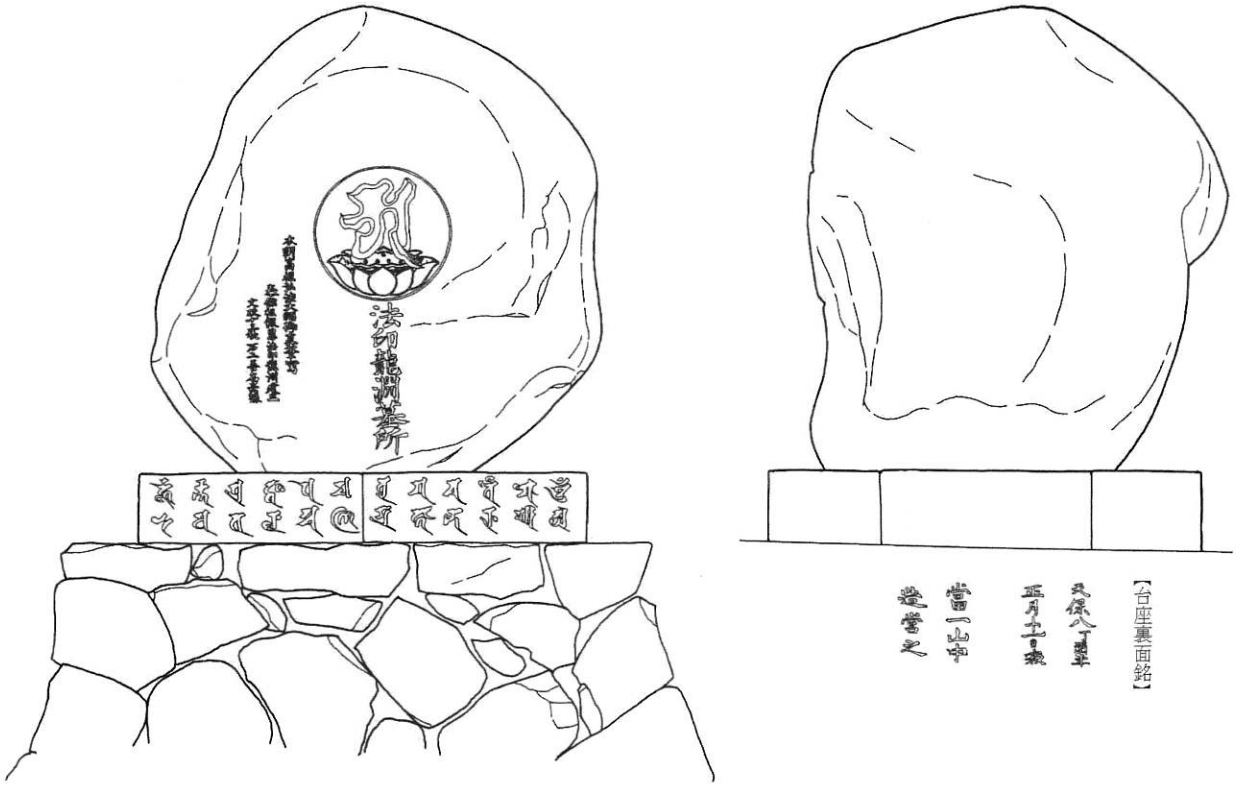


図２　閻魔堂境内　阿字観碑　実測図（1:20）

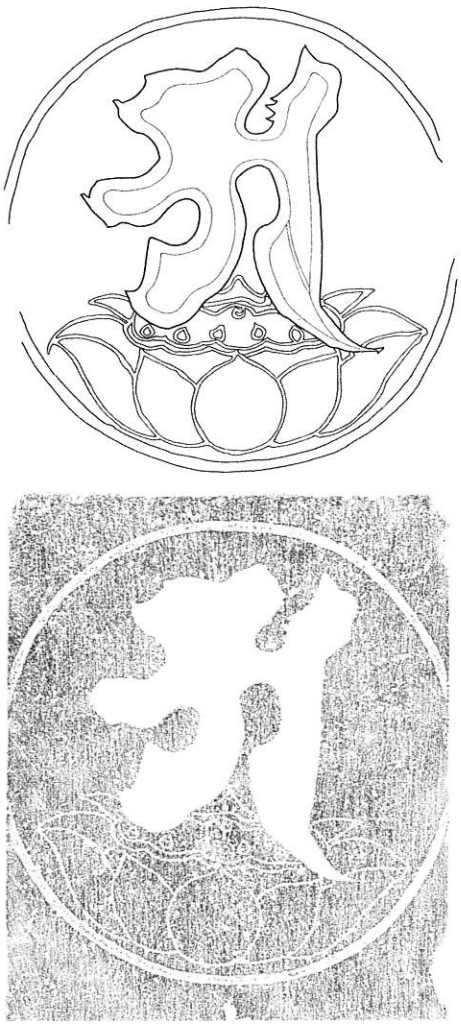


図 3 明念坂阿字観碑 阿字部分（裏面）

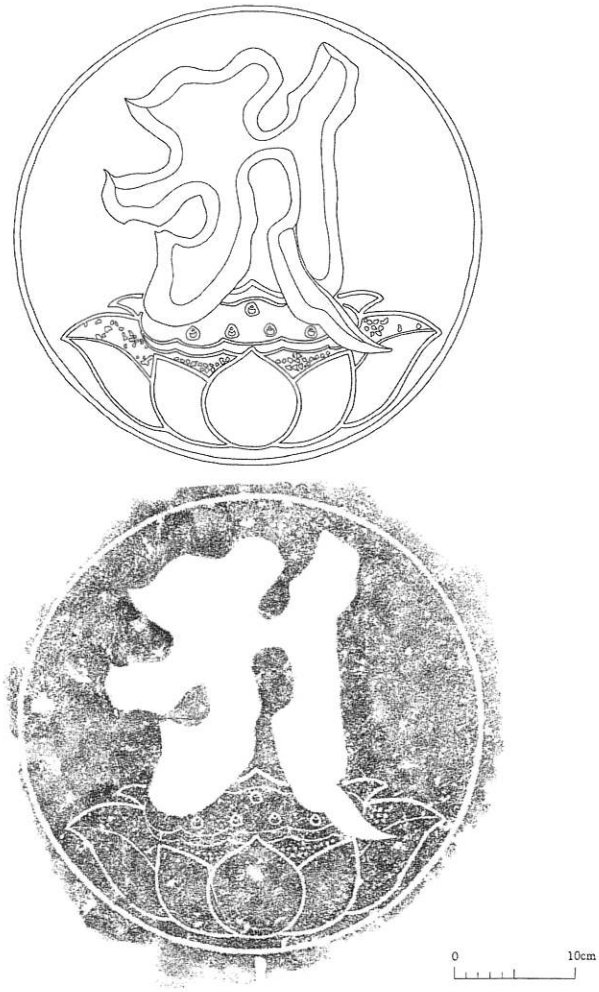
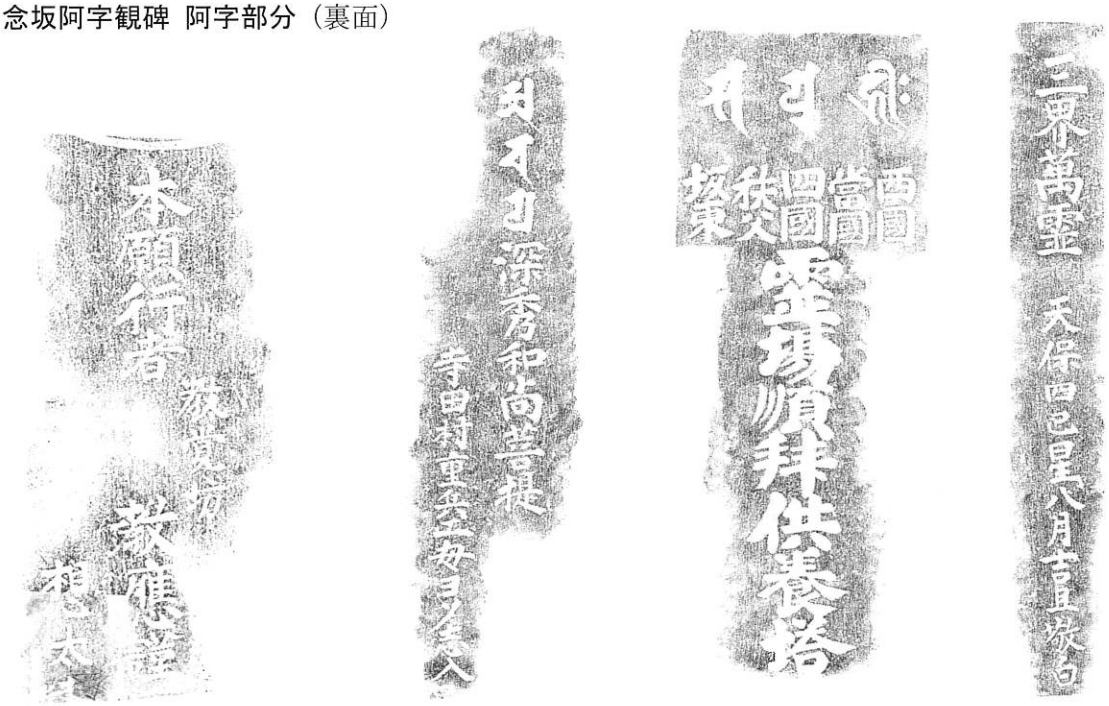


図 4　閻魔堂境内阿字観碑 阿字部分



裏面　左面　正面　右面

刻銘拓影

巡礼塔　正面

巡礼塔　左面

裏面阿字部分

阿字下蓮弁

引用参考文献

井上鋭夫校訂　1974　『加越能寺社由来　上巻』石川県図書館協会

大山町史編纂委員会編　1964　『大山町史』大山町

楠瀬　勝編　1986　『下村史』

立山町教育委員会編　2002　『宮路金山家文書目録　上』

立山町教育委員会編　2012　『立山信仰宗教村落―岩峅寺―石造物等調査報告書』

富山県編　1988　『富山県史』史料編Ⅳ　近世中付録

富山県[立山博物館]編　1993　『立山中宮寺跡石造物分布卯調査報告』

富山市教育委員会埋蔵文化財センター編　2013　『富山市内石造物等調査報告書』Ⅱ

野島好二　1970　『小川山千光寺誌』

福王寺　1958頃　『福王寺』

古川知明　2011　「常願寺川石工甚右衛門について」『富山史壇』第164号　越中史壇会

古川知明　2012a　「常願寺川石工中嶋栄蔵について」『富山史壇』第168号　越中史壇会

古川知明　2012b　「富山県東部における近世石造物研究―主に石工研究から―」『北陸の石造物―研究の現状と課題―』石造物研究会

古川知明　2013a　「富山町石工佐伯伝右衛門について」『富山市の遺跡物語』14　富山教育委員会埋蔵文化財センター

古川知明　2013b「常願寺川石工北野甚蔵について」『大境』第32号　富山考古学会

古川知明　2014a　「常願寺川石工観成について」『大境』第33号　富山考古学会

古川知明　2014b　「富山町石工見上兵右衛門について」『富山市石造物等調査報告書Ⅲ』富山市教育委員会埋蔵文化財センター

古川知明　2015a　「富山町石工佐伯伝右衛門について(続)」『富山市石造物等調査報告書Ⅳ』富山市教育委員会埋蔵文化財センター

古川知明　2015b　「富山町石工伝助について」『富山市の遺跡物語』16　富山教育委員会埋蔵文化財センター

古川知明　2015c　「弥勒菩薩形墓石について―富山県中央部における近世丸彫石仏形墓石の一形態―」『大境』第34号　富山考古学会

古川知明・伊集守道　2008　「医王山東薬寺の文化四年銘宝篋印塔下の埋納礫石経の調査」『富山市考古資料館紀要』第27号

古川知明・蓮沼優介　2009　「五穀山龍高寺宝篋印塔と礫石経の調査」『富山市考古資料館紀要』第28号

山崎明代編　1991　『越中古文書』越中資料集成1　桂書房

富山市石造物調査報告書Ⅴ　正誤表

誤	正
表4	表4

代	在年・忌日	西暦
12	天保5	1834
16	明治38	1905

代	在年・忌日	西暦
12	天保5	1834
16	明治38	1905

報　告　書　抄　録

ふりがな	とやましないせきぞうぶつちょうさほうこくしょ　ご
書名	富山市内石造物調査報告Ⅴ
副書名	
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	83
編著者名	古川知明
編集機関	富山市教育委員会　埋蔵文化財センター
編集機関所在地	〒930-0091　富山市愛宕町１丁目 2-24　　TEL. 076-442-4246
発行年月日	西暦　2016 年 3 月 31 日

所収文化財名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
近世石造物（きんせいせきぞうぶつ）	富山県那中新川郡立山町					20150401～20160331		石造物調査

所収文化財名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
近世石造物	宝篋印塔	江戸			宝林山福王寺、宮路金山家墓所
	巡礼塔	江戸			立山町芦峅寺明念坂

要約

18 世紀後半～19 世紀前半の宝篋印塔 2 基及び巡礼塔 1 基について調査を行った。

福王寺墓地宝篋印塔は、2 基があり、1 基は同寺 4 世住職真源和尚の供養塔で 18 世紀後半以降のもの、もう 1 基は年代不明である。いずれも立山天狗山石などの安山岩を使用する。石塔の特徴から、前者は富山町石工佐伯伝右衛門または伝助、後者は富山町石工見上兵右衛門の作と推定され、年代は江戸後期、14 世住職秀栄和尚の供養塔か。

宮路金山家宝篋印塔は、墓所中央に建てられた供養塔である。嘉永元年金山家 5 代茂左衛門兵蔵が先祖供養のため造立した。曹洞宗大川寺 28 世大見住職の謹誌による刻銘がある。石工は宮路村の金山弥右衛門である。

立山町芦峅寺明念坂の供養塔は、越中と百観音霊場巡礼供養塔である。芦峅寺宿坊教覚坊教応らが本願を立て、その結願の記念として天保 4 年造立したものである。造立にあたっては寺田村信徒が大仙坊住職深秀和尚の菩提供養もかねて造立費用を寄進した。裏面の阿字は、明念坂横の閻魔堂境内にある文政 13 年造立の阿字観碑（真言僧龍淵墓所）と同一の下書が使用されていることから、後者を製作した善名村石工北野甚蔵がこの巡礼塔を製作したと推定される。

富山市埋蔵文化財調査報告 83

富山市内石造物調査報告書Ⅴ

発行日　平成 28（2016）年 3 月 31 日
発行機関　富山市教育委員会
編集機関　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒930-0091
富山県富山市愛宕町 1 丁目 2 番 24 号
☎　076-442-4246
Fax 076-442-5810
E-mail：maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印刷　前田印刷株式会社